

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

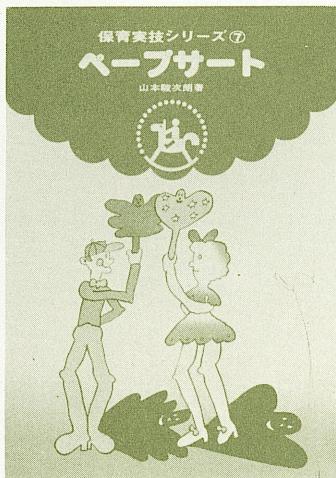


保育実技シリーズ⑦

ペーパーサート

山本駿次朗著 1,000円

子どもたちの喜ぶ遊びのタネが
また1つふえます！



「ヘンシーン！」

クレリと裏をひっくり返すと、
登場人物が突然変身する、昔なつ
かしいペーパーサート。テレビの変
身ものとはまた違つた、素朴な手
作りの味わいが楽しめます。

人形絵や舞台の作り方、演出の
くふうがていねいに図入りで解説
されています。ペーパーサートの特
色を十分いかした脚本も13篇、収
録。（従来の裏が出てくるだけの
ものから、複雑な動きや変身を生
むしあげペーパーサート、セリフの
ない新しい応用ペーパーサートと盛
り沢山！）

—近刊！—

保育実技シリーズ⑧

幼児の造形あそび 1

保育実技シリーズ⑨

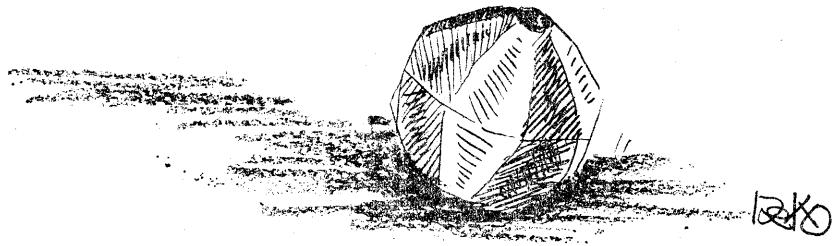
幼児の造形あそび 2

フレーベル館

幼児の教育

第七十五卷 第五号





幼児の教育 目 次

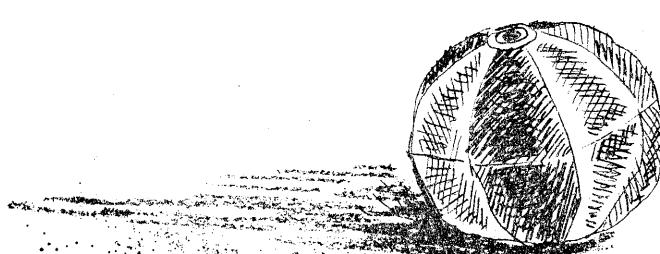
— 第七十五卷 五月号 —

表紙 永瀬善郎
(「もの想う天使」)

カット 中島英子

- 鯉魚 辻 嘉一 (4)
鯉のぼりと金太郎 斎藤 良輔 (7)

- 保育の中の小さなこと大切なこと② 守永英子 (14)
私の保育 元木正子 (16)
幼児その個性と共同体性 西村とき子 (18)
——遊びと集団生活の指導を巡って—— 西村とき子 (18)



★講演

三つ子の魂（上）

外山滋比古…(21)

椿と私

——津山尚先生に向かへ——

(30)

教科研究における保育の授業の展開（11）

磯部景子…(36)

乳児期の母子関係

——Attachmentの形成を中心に——（前編）

岡野雅子…(42)

「それぞれの子どもらしさを求めて」より（八）

(50)

学校訪問旅行記雑感（その一）

村田修子…(55)

鯉

魚

辻

嘉

一

登童門

薰風の五月晴れの大空に泳ぐ鯉のぼりは、その家の男児出生の歓喜を誇らかに表明しているようあります。影ひたす水さへ色はみどりなり

庭の梢の^{こずえ}おなじ若葉に 定家

お節供の頃には、見るもの、聞くこと、いずれもがみどりみどりで、菖蒲や柏の葉から^{まご}真菰に至るまでのみどりの力強さは、幼児期から少年期へと成長する姿そのままのように思えるのであります。そのみどりに囲まれた庭園の池の鯉が、ビュンと飛びはねる姿は、静寂の境地に活気を与え、日本の自然の美しさを見直させてくれます。

鯉は清らかな渓流や冷水湖などは好まず、やや温暖でいくぶん濁った水を好み、冬は泥土にかくれるようにして冬眠に入れります。産卵期は初夏でありまして、三十万個からの卵を産むそで、多産系の川魚の王者であります。

寒鯉のみじろげば湧く濁り哉

菁 果

鯉の原産地は中央アジアとも、中国だともいわれておりますが、寿命は五、六十年といわれ、普通二尺（六十七セン

チメートル強)から五尺(一メートル半)ぐらいにまで達し、揚子江や黄河には一丈余(三メートル強)の大鯉が棲んでいるそうです。中国には古来、鯉にまつわる伝説が沢山あります。龍門の鯉もその一つであります。人の出世するのを登龍門と云うのは、「鯉は年数を経ると、その性靈に通じて、江湖を越えて龍門に至る。龍門の水は険急千仞、魚にしてよくこれに登るものがない中に、鯉は即ちこれに登って竜となる」と、古書にみえます。

今、中国で問題になつてゐる孔子も鯉魚の縁起を喜ばれたらしく、「魯君、曾て孔子に鯉魚を贈りしに、孔子喜びてその子を鯉と名づけ、字を伯魚と称せしむ」と、その書にあり、大昔から貴重な扱いをうけた魚であります。

淀の鯉

鯉は長流に棲むものが最も味がすぐれており、湖水の産がこれに次ぎ、池や沼に棲むものは泥臭くて味劣ると――昔からの定評であります。

室町時代の幕府の管領だった細川勝元は、鯉が大好きだったらしく、通人としての逸話が残つております。「他国

の鯉は作りて酒に浸す時、一両箸に及べばその汁濁れり、淀の鯉は然らず、いかほど浸せども汁は薄くして濁りなし、これ名物のしるしなり」と言つたと伝えられております。関西では淀川は長流であり、自然に淀の鯉の名が高かつたのだと思われます。今の競馬場で有名な淀町であります。淀川は淀城に預けられていたために、淀君の名が生まれたと伝えられ、小藩の城下町であります。

もともと川魚は水圧を強く受けておりませんので、刺身にすると、すぐ硬直して、しばらくすると水分が滲みでてまいります。海魚のカツオでも、上層を泳ぐために水圧を受けず、刺身にしてもやはり水分が滲みでるので、それを

止めると共に味わいをよくするため——カソオの叩きという料理法が生まれたほどであります。

勝元の言葉にある「酒に浸して」ということは、現代人には通じないと思いますが、昔は「煎り酒」と呼んで清酒へ古漬の梅干を沢山入れて火にかけ、半分量に煮つめたものに、好みの調味を加えたものであります。

鯉の薬効

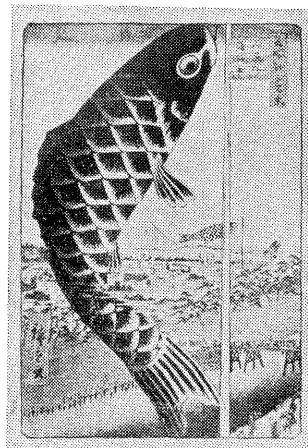
竜になると言われる鯉は靈魚であります、これをよく制御した仙人の話も有名であります。

宋の康王に仕えたことのある琴高仙人は、竜の子を取ろうとして弟子たちと約したところ、皆が斎戒沐浴して、水辺に祠を設けて待っていると、仙人が大きな鯉に乗って現われたと伝えられています。この図に興味があるのか尾形光琳も円山応挙も名筆が残っております。

また、鯉には六十六魚という異名があり、六十六鱗とも言うそうで、不思議なことに鯉の首のところから尾までの、真中のウロコの数が三十六枚必ず並んでおります。そして鯉のウロコはゼラチン質であつて、アメダキやコイコク汁にするには、ウロコの五枚目の肝臓を取り去り、ウロコをつけたまま輪切りにして鍋の水たっぷりへ沈めて、約二時間コトコトと煮ますと、ウロコは軟かく煮えておいしくいただけます。

コイコクを食べると母乳がよくなると言われており、またコイの肝臓は乾燥しておくと、腹痛によく効くといわれております。

鯉のぼりと金太郎



(広重)



斎藤良輔



(歌麿)

オモシロソウニ オヨイデル

昭和六年発行の『王ホンシャウカ』(日本教育音楽協会

編)に収録されている「コイノボリ」の歌は、いまも幼い子どもたちにしたしまれ、「コイノボリ」の季節になると、テレビやラジオでもよく耳にする。五月の青空におよべ鯉

菖蒲の節句

ヤネ ヨリ タカイ コイノボリ
オオキイ マゴイ ハオトウサン
チイサイ ヒゴイ ハコドモタチ

のぼりは、まことに端午（たんご）の節句のさわやかなシムボルである。

このごろは、三月の桃の節句がすむと、それを待ちかねていたように、すぐデパートの屋上などに、こんどは男の子のための節句の鯉のぼりが立てられて、マスコミの話題になつたりする。五月人形売り出しの商戦P.R.にはやばやとつかわれているわけだが、鯉のぼりは、端午の節句に、男の子の出世や健康を祈つて外飾りにされてきた。

ところで、「端午」というのは、五月の端（はじめ）の

午（うま）の日という意味で、「午」と「五」が同じ音であることなどから、五月五日を端午というようになつたといわれている。

また、「節句」は、もと「節供」と書いて節日に供える

「供御」（飲食物）のことであった。正月十五日のカニ、三月三日の草モチ、五月五日のチマキ、七月七日の索餅（さくべい）、九月九日の菊酒、十月初亥の日の亥の子餅などがある。こうした季節の変わり目には、神にそれぞれの供御を供えて、健やかな暮しを祈つたのである。遠い時代には、これらの節日の行事のひとつに、厄祓らいの「人形」（ひとがた）を川に流す習俗があったが、この人形流しをやめ

て供御とならんで、これを家のなかに飾るようになり、三月の雛祭りが生まれた。

女の子の雛祭りは、平安王朝時代の「ひいなあそび」にその源流がみられるが、江戸時代になると、三月が桃の節句であるのたいして、五月は男の子のための菖蒲（しょうぶ）の節句として各家庭が盛んに祝うようになった。

端午の節句のころは、菖蒲の花の咲く季節である。菖蒲は、邪氣を追いはらう力をもつていると昔から信じられていた。

古代中国では、五月五日を重五の悪日とし、その災厄、病疾をはらう行事として、菖蒲をひたした酒を飲んだり、あるいはこれも同じく魔をはらう力があると信じるヨモギで作った人形を門戸にかけたりした。

この風習が日本に伝えられ、平安時代には宮中でこの日節会（せちえ）を催し、菖蒲を屋根にかけたり、冠につけたりして身の無病息災を祈つた。王朝文学の『枕草子』（清少納言）にも、

「節は五月（さつき）にしく月はなし。菖蒲（さうぶ）蓬（よもぎ）などのかをりあひたる、いみじくをかし。九重（ここのく）の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民の住家

(すみか)まで、いかでわがもとにしげく菖かむと菖きわたしたる、なほいとめづらし」

と、一般の民家までが屋根屋根を菖蒲で葺く様子を記している。古くからこうした習俗のあつたことがわかる。

菖蒲湯に入るのも行事のひとつであるが、江戸時代になると、「菖蒲」が「尚武」に通じるところから、武を尚（とう）ぶ武家階級では、ことにこの行事を重んじて、家紋

をするした旗指物やのぼり（細長い布の端に竿を通して立てる旗の一種）や吹き流し（竹の輪に長い絹を張って竿の先に結びつけた旗の一種）などの武家飾りを、その家の玄関前にならべ立てることが流行した。

これにたいして、武家に対抗する力をつけてきた町人階級の間では、江戸期の中ごろから、そうした武具ののぼり類の代わりに、平和的な鯉のぼりを屋外に立てる風景がみられるようになつた。

もともと鯉は、中国の龍門伝説にも示されているように、立身出世の象徴である。この伝説によると、黄河の上流にある龍門をさかのぼることのできた鯉は、龍と化すといふのである。「登龍門」ということばも、それから生まれた。

江戸時代には、こうした話から「鯉の滝登り」などとう流行おもちゃが登場した。木製長方形の箱の表面に描かれた滝の図の中央に細長く縦に穴があけてある。それをおもやの鯉が作りつけてあり、鯉がその穴をからくり仕掛けで上下すると、ちょうど滝登りをしているように見えるものである。また、五月節句の菖蒲のぼりにも、鯉の絵を描いたものが現われてきた。

こうしたアイデアが、やがてこの鯉を吹き流しに仕立てた。独立した鯉のぼりの誕生である。二百年ほど前の江戸川柳に、

五月雨が晴れると鯉のたけ（滝＝竹）のぼり

というのがある。竹竿に結ばれた紙鯉が、風をはらんで大空をおよぐのを滝のぼりと見立てたわけである。民俗学的には、これは神を招くための招（お）ぎ代の変化したものともいえるが、江戸の町々の屋根には、このころすでに威勢のいい鯉のぼりがすでにみられたことが想像される。幕末、安藤広重の描いた『名所江戸百景』には、水道橋駿河台から遠く富士山を望む一帯の屋根屋根に、鯉のぼりがいくつもあがっている有名な錦絵がある。

一方では、江戸中期から節句飾りを屋内に移した座敷飾

りがはじまる。それにつれて鯉のぼりにも、室内飾り用の

矢車、その下に吹き流し、真鯉、紺鯉の順である。

小型物が出現してくる。木綿またはチリメン製で、なかに

灯心や綿を縫いくるんだもので、金時などをこれに乗せた

ものもある。

ところで外飾りのほうの鯉のぼりは、明治期以後節句行事

事が盛んになるにつれて、大型化が目立つてくる。

「五月になると、男の子のある家では鯉幟を立てる。火

事師（ひごとし）が来て、物干の柱に太い高い高い丸太を立ててくれる。そのテッペンに、矢車が日をはじいて風に廻っている。丸太の上方に滑車が付いていて、それに太い細引きが通してある。朝起きたと、布で作った鯉幟を結んで、キリキリ、キリキリと引き上げるのである。」

作家、小島政二郎は、その作品『下谷生れ』（昭和四年）に、鯉のぼりの思い出をこう記している。

ちかごろでは紙製で五・五メートル、布製で八間物（一四・四メートル）といったものも現われるようになり、布製のはかナイロン製も出回っている。

どの鯉のぼりも、真鯉（黒）を大きく、紺鯉（赤）は小さく作られており、のぼりを立てるばあいは、真鯉を上に、紺鯉を下にするのが正しいとされている。上から回転球、

端午の節句には、男の子の祝いとして、さまざまな人形類が飾られる。これらは「五月人形」ともいう。

神功皇后と武内宿祢、八幡太郎義家、鎮西八郎為朝、坂

田金時、源義經、牛若丸と弁慶、太閤秀吉、日吉丸、加藤清正、山姥金時、頼光と金時、さらに関羽、鍾馗など和漢の英雄、豪傑を人形化したものである。武者姿をしたのが多いので「武者人形」「かぶと人形」などとも呼ばれる。

五月人形を飾るのは、男の子が健やかに成長して、雄々しくりっぱな人物になつてほしいとねがう親の祈りが、そこにこめられていることでもある。
三月の雛祭りにしても、五月の節句飾りにしても、このようないい人形祭りが国民的な行事として、長い伝統をもちながら、いまもおこなわれているのは、世界にも例のないことである。

日本は、世界で指おりの「人形王国」といわれ、さまざまな種類の人形をゆたかにもち合わせている。人形づくりのすぐれた技術と才能に恵まれた点もあげられるが、何よ

節句飾り

りも人形を愛する国民性が、これらの数多い人形類を生みだしたのである。

ことに三月、五月にそれぞれ節句人形を飾つて祝う行事には、人形あそびのなかに「祈り」をとけこませてある点に、日本的な特徴がよくうかがえる。

江戸時代のはじめには、五月の節句に模造の飾りかぶとを、そのほかの武具類やのぼり、吹き流しなどといっしょに屋外にならべ立てる風習があつた。この飾りかぶとが、やがて武者人形類を生みだす母体となつた。

飾りかぶとは、厚紙や薄板製のもので、それに木や紙細工の人形がついたものであつた。その後かぶとの作り物の人形が姿を消し、こんどは別に手足のない武者人形をほかの外飾りとならべて家の前のかごに飾ることが流行するようになつた。

この流行は地方にも伝わり、甲斐（山梨県）の節句人形

「かなかんぶつ」のような武将姿をかたどった外飾りも出現する。「かなかんぶつ」は、張り子の武者面に厚紙製の前立てかぶととよろい垂れをつけ、台木で支えて立てた人形である。この地方独特な端午の節句飾りとして玄関や人目につきやすい場所に置いた。この風習は、戦後忘れら

れたが、人形は郷土玩具としてその名ごりをとどめている。

この外飾り人形は、江戸後期になると室内に移動する。奥の座敷に赤毛氈を敷き、小型になった室内用のぼりなどの前に人形類はならべ飾られるようになった。小さくて美しい精巧な作品が出そろつてくる。鎖国下に平和な日々が続いた泰平の代の姿がここに反映する。節句飾りの形式が、屋外から屋内へ——と変わるにつれて、人形が重点となり、その種類も激増する。

それと同時に節句行事には、男の子の誕生祝いの意味がもたれ、その初節句には親類知人からかぶと人形を贈る風習が盛んになつた。

ところが明治維新を迎え、明治六年（一八七三）一月から太陽暦が実施になると、それにともなつて端午の祝いなどの五節句廃止が発令される。

これによつて民間でも、この風習は一時すたれてしまふが、明治三十年代には雛祭りの復興とならん、端午の節前立てかぶとよろい垂れをつけ、台木で支えて立てた人形である。この地方独特な端午の節句飾りとして玄関や人目につきやすい場所に置いた。この風習は、戦後忘れら

市内の銭湯では菖蒲湯をたて、七歳以下の男の子のある家

では、のぼりを立てて、かぶと人形を飾る。また、チャマキ、カシワ餅を作つて近所に配る」など、そのころの慣習風景が伝えられている。

東京や菖蒲かけたる家古し（正岡子規）

などの句もあるように、明治三十年ごろの東京では、家の軒に菖蒲をさす習俗はほとんどみられなくなつたようだが、日本橋十軒店や両国広小路では、かぶと人形の市がにぎやかに開かれた。「のぼり市」ともいい、売り出しは四月下旬からであつた。

明治後期にデパートが登場してくると、この人形市はさらに早くから開かれるようになり、この売り出しはいつかデパートが主体となり、現在に続いている。

時代の流れにしたがつて、節句飾りもさまざまに移り変わること。

江戸時代に、はなやかさを示した外飾りは、かつてののぼり類が衰退して、現在ではほとんど鯉のぼりだけになつた。座敷飾りは、のぼり飾りの前に飾り具足、または飾りかぶとを置き、これを中心に節句人形、武具、神馬などをならべ、三宝に菖蒲酒、チャマキ、カシワ餅などをのせて供える形式が多くなつてゐる。

それらの五月人形のなかで、いつも変わらぬ人氣者は「金太郎」である。ことに暫（しばらく）金時の人形などは、五月人形全体のなかでかなりのパーセントを占めているように思われる。これは歌舞伎十八番のひとつ、「暫」の舞台姿を人形化したものである。

金太郎は、源頼光の四天王の一人として、強勇の名をあげた坂田金時の幼名である。相模國（神奈川県）足柄山の山姥（やまうば）の子として生まれた怪力の持ち主で、全身が赤く、強健な子どもの象徴としてしままれてゐる。

江戸中期から、金太郎は五月の節句人形として飾られ、外飾りののぼりの絵にも描かれるなど、五月人形のなかでは、鍾馗などとならんでその中心となつてゐる。

熊と相撲をとっているもの、あるいは鯉抱き、マサカリや太刀をもつたものなど、いろいろな型がある。全国各地に残存する伝承的な節句飾りの郷土人形にも「熊金」と呼ばれるものがある。金太郎と熊とを扱つたもので、熊は「力」を意味し、それにもまさる金太郎の「強壮」ぶりを表現したものといわれる。

これらの金太郎人形は、その肌が赤く彩色されているところから、土地によつてはこれを「赤物」ともいつてゐる。

る。

この「赤い」色には、悪疫や病魔などを退散させる強い力が秘められていると、私たちの先祖のあいだでは古くから信じられてきた。金太郎人形のほか、伝承的な郷土玩

具類には、赤い色に塗った鰐車やだるまなどがある。いずれも子どもの疱瘡（ほうそう）よけのまじないとされ、病児の枕もとに飾れば、この「赤い」力によって病気が快癒するという民間信仰につながっている。

いわば信仰玩具のひとつといえるが、これに比べてヨーロッパのおもちゃは、子どもの「あそび」道具に宗教的な要素はない。「赤物」という一種の「神性」をもたせているところには、東洋的な体質が感じられる。

日本民族は、「あそび」と「信仰」とを矛盾なく共有できる性格をもつてゐるといふ。それにつけて医療施設が乏しい時代、貧しい多くの人たちは、絶えず病魔の影におびえて生きねばならなかつた。

ことに幼い子どもたちの死亡率は異常に高く、江戸時代のそれは大正年代の十九倍にもぼつていたといふ。庶民が生きるためにには、神仏の加護をねがうほかはなかつた。

「赤い色」の人形、おもちゃには、「どうぞ、子どもが丈夫

で育つてくれますように！」という親の祈りがこめられている。こうしたところに日本の人の人形の成り立ちが指摘されるのである。

昭和二十二年（一九四七）五月、新しい日本国憲法が実施となつた三日から五日にかけて、平和の回復を宣言するよう、戦後はじめての「端午祭り」が九段の靖国神社でおこなわれた。境内には、大きな鯉のぼりが、久しぶりにあげられ、敗戦のいたいたしい焼野原を無心に見おろしていた。

鯉のぼり空は占領下を知らず（史城）

という当時の感慨も、すでに三十年近い過去の日となつた。

そして、いまその「五月五日」は、「子どもの人格を重んじ、子どもの幸福をはかる」国民の祝日のひとつ、「子どもの日」となつた。

日本じゅうの子どもたちが、健やかに、正しく育つよう——長い歴史を経て、端午の節句の意味は、「鯉のぼり」の日として生きているのである。

保育の中の小さなこと大切なこと

(2)

—S夫とあき箱—

守 永 英 子

三歳児クラスのS夫は、保育室の隅から、何か目新しいものを見つけてくるのが好きである。

十月も半ば過ぎのある日、S夫は、あき箱をかかえて、保育室の中を、何をするともなく歩いていた。この箱は、石けんと香水がセットになつてはいつていた厚紙のしつかりした箱で、ふたと身が一辺でついているものである。

S夫は、ときどき、パタパタと箱のふたをあけたりしめたりしていたが、私のそばにくると、私の顔の前で、パタッと箱のふたを閉じてみせて、「ほらっ！」と言つた。パタリとしまつた箱の音を聞き、突然閉じられた箱のふたと身の間から、風が私の顔にかかったその時、私には、「ほらっ！」という短い言葉のうしるにあるS夫の気持ちが、よく分かつた。ようと思われた。「あつ、音がした。風がきたわ」という私の驚きの反応に、S夫は、以前作つた風車のことを思い出し

たように、「この風で、風車まわそうか」とひとりごとのようになつたが、やつてみようという風でもなく、私の驚きで、充分満足したように、その場を離れて行つた。

S夫の行動を理解できたと思った瞬間は、私には感動的なものであつた。

S夫は私にとって、分かりやすい子どもではなかつた。入園当初は、激しくはないが、衝動的な危険な行動がやや目につく子どもで、園庭でしゃがんでじやりをいじつている子どもに石を投げたり、立つている人を突然つきとぼしたりした。友だちへの関心はあっても、かかわり方がよく分からないらしく、足にからみついたらしつこくするためトラブルをおこしていた。

二学期になつて、少しは落ちついてきたものの、あき箱の

ストックの中から目新しいものを見つけ出しては、それで何かを作るという風でもなく、セロテープでちょっとはりつけたり、ただ持つて歩いたりする。あるいは、「……を作ろう」と言うが、自分で言つたものを作るのでもなく、また、それに対する大人の助力も彼には不要らしく、「いいんだよ」と軽く拒否し、その結果でき上るものは、完成品なのか、途中なのか、何ができたのか、私には分からぬものであった。

S夫自身にも、何を自分が本当にしたいのか分かつてないのではないかという感じであった。

S夫のそのような状態に対し、私の気持ちは、"せつかく集めておいた材料をもう少し活用してほしいけれど、材料体験の大切な時期だから、あせらずに待たねばならない"という程の、積極的な肯定とはいえないものであった。

このような状態であつたから、S夫の行動を"なるほど"と思えたことは、私にとっては感動であり、今まで"材料体験の時期"などと分かつたつもりでいたことが、何と空疎なものであつたかという実感であつた。
私のS夫に対する気持ちが、積極的な肯定に変わったとき、S夫の行動が、私の心に見えてくるようになり、"材料体験"。

という空疎な言葉が、S夫の行動で次々と満たされてきた。ヤクルトのびんを二つずつ輪ゴムでくくったものを、いろいろ積んでみたときも、クレラップの芯の筒をいちごのあき箱の裏に煙突のようにはりつけて耳に当たたときも、彼は説明もなく「ほらっ！」と私に示しただけであったが、私は彼の気持ちがよく分かった。

私が彼の気持ちが分かるよう思えたとき、彼も私の気持ちが分かるようになったことを私は感じることができた。私がクラス全体に話をしているときに、彼は以前よりずっと落ちついて話を聞くようになつたし、急いで遊具の片づけをしてほしい時も、彼はよくやつてくれるようになつた。いつもそうであると確信して言えるほど強固なものでないにしても、彼と私の間は、目に見えない糸で、やつとつながつたという気がしている。

そして、保育のベースに欠くことのできないこの"見えない糸"が、消えてしまわないように、より確かなものになるように育していくことが、次の私の課題と思っている。

私の保育



元木正子

自然の中の幼稚園

桜吹雪の舞い散る園庭で、記念写真の撮影も無事にすみ、ほつとする。わが子と手をとり合いながら、母親たちも入園の喜びをかくし切れないような面持ちで、担任の話を聞きに、また園舎へと向う。

昭和五十年四月、開園式を迎えた幼稚園に、私もまた、子どもたちといつしょに遊べる喜びをかみしめていた。

保育の原理を、この子どもたちの上に一心に考え、子どもといつしょに数々の遊びを創り出し、保育者としては、常に学び、修養する心を失わず、明かるく、いきいきした姿で保育を展開できるように心掛けたいと思う。明日から、この庭で、保育室で、子どもたちはどんな気持ちで遊びをくり広げるのであろうか。三人の保育者は、ひとりひとりの子どもの顔を思い浮かべながら、それぞれに感慨一しおのひとときを持つて話し合った。

幸せなことにこの園舎は、杉、松の木でかこまれた広い園庭がある。村から拝借した仮の園舎であるが、朝は野鳥が集まり、幼稚園に来ただけで何か気持ちがせいせいして来る。この自然の美しさ、偉大さを最大限に活用した保育を試みようと、七月の終業式の前夜、夜の幼稚園の庭で子どもたちと過ごす集まりをもつた。庭に薪を積み上げ日の暮れるのを待つ。夕方六時、子どもたちは興味しんしんといった顔で登園して来た。だんだん日が沈み、園庭の木立ちがシルエットになつて見え始めた頃、薪をかこんでまるくなる。子どもたちの知っているうたをうたいながら待つていると、年長組の子どもたちが、自分で作った紙のロウソクを薪に近づけると担任が火をつける。「もえろよもえろ」のうたを母

親たちも合唱していると、ぱちぱちと火の粉を撒き散らしながら、高く煙は登って行った。子どもたちから喚声が上る。何時のか邊りはまづくらになり、赤い炎に照らし出された子どもの顔は、みなはち切れそうにこにこしていた。

稻藁で作った馬にのつてレースを始める。子どもたちはみんなインデアンの羽かざりをつけて走り廻る。丁度魔法使いが簾に乗つたように、馬の耳をしつかり握つて走ると、つけた鈴が素朴な音を出して鳴っていた。「インデアンが通る」をうたいながら、半円では物足りないような子どももいたが、とに角思い切り力を出してかけ廻つた満足感が見られた。後は母親たちとみんないつしょに、フォークダンスをした。

約一時間、子どもたちは涼しくなった山の空気を一杯吸いながらこの会は終つた。山の夜の景色は、子どもにどんな関心を持たせてくれたであろうか。保育者は無事にすんだと思うと同時に今年だけなく、また来年も、子どもの喜ぶ顔が見たくなつていった。私たちのこの遊びは、少しでも子どもたちのこころを豊かにすることに役立てば本当にうれしい氣がする。

豆　　ま　　き

鬼のお面は、子どもたちが作る。豆撒きはこの村のやり方をと

り入れて、子どもたちに経験させてあげようと考えた。地元出身の先生から、鰯の頭を豆殻につけておまじないを言うことを教えてもらつた。

園庭で子どもたちに枯れ葉を集めてもらい、金物のほうろく鍋をかまと代りの石油カンにのせて豆を煎つた。出て来る煙を鰯の頭に代る代るつけながら、「おこりんぼむしとんでゆけ」「なきむしとんでゆけ」「〇〇むしとんでゆけ」と自分で考えたおまじないを言つていた。

全部の子どものおまじないがすんだ後、鰯の頭は玄関の入口に格の枝にさして豆撒きをすると、もう鬼が入つてこないことを話す。子どもたちはあたたかい豆を撒き、年の数だけ食べてまめまきは終つた。

この一年の中のささやかな経験を書いたのであるが、保育の中にいかされる行事のとり入れ方に、このような方法はどんなものかと摸索中である。新しい幼稚園ということもあって、伝統もないが、ひとつひとつの子どもの経験が、将来、精神生活を豊かに出来る何かの力になれば嬉しい。よりよい保育の積み重ねがなされるよう、常に初心にたち帰り、謙虚に反省をしてゆきたいと思う。

(城西大学付属鳩山幼稚園)

幼児その個性と共同体性

—遊びと集団生活の指導を巡つて—

西村とぎ子

この一ヶ月近く、朝みんなより早く登園してくる女の子三人、彼女たちは年中、年長の一学期前半まで消極的で言葉の少ない、ど

こか遠慮がちな子どもたちだった。ところが毎朝三人は申し合わ

せたようにして門に立ち、友だちを迎える役を誰に言われた

のでもなく自ら買って出た。一人一人の友だちに手をさし出し握手を交わして「おはよう！」と言うその表情は、自主的に役割を果している自信が窺える。その上それを一つのあそびと彼等は理解しているので、非常に楽しそうだ。

一人一人の子どもの個々にあつた育ちを大切にされる保育、子

どもの中にある可能性の芽を摘みとらず、できるだけゆっくりと確実に花開くための手助けをそつとしていきたいという私たち教師の願いは、弱い子どもはそれなりに、子どもの集団の中に安定の場を見出し生きる自信、友だちや先生から受ける生活の楽しさを幼稚園という場の中で体験して欲しいと願つて歩んできた。そ

んな保育を今省み、幼児の育ちとはどういうことなのかを私共の幼稚園の実態を通して考えてみたい。

幼稚園の実態は次のようである。

年長組二クラス五四名、年中組二クラス五一名、年少組一クラス二〇名計一二五名、内各クラスに自閉児一名及び知恵遅れ一名小児マヒ児一名、計一三名の障害をもつた子どもが平均三名ずつ在籍。クラス担任五名、フリー教師四名、園長、主任の計一一名のスタッフ。

今から約十年前、はからずも受け入れた子どもが自閉児だったことから歩みだした統合保育。さらに保育の原点を問い合わせざるを得なくなり、はじめた自由保育への模索、次に掲げるのはその保育形態の変遷のプロセスである。

一斉保育

←

毎週金曜日または月曜日の一日を自由な活動の日（自主活動と名付けた）とする。

←

一日の中のある時間、登園から十時半位までを自主活動とする。

←

自主活動プラス一部クラス活動（主に礼拝、話し合い等）。

←

自主活動が主。

以上のように少しずつ変えてきた。

その中で絶えず指向し自由保育的保育に近づけようとしてきた根底は次の点にある。

①画一化され、枠組された中で上手に泳げる子ども、指示行為に従順な子どものみが良しとされがちな保育から、何とかして子ども自身の中から自由で主体的な行動のとれる力強い心身の成長を求めてきた。

②ハンディを持っている子どもも、健康な子どもの集団の中でその触れ合いを通して、ごく普通のノーマルな刺激が与えられ、ハ

ンディを克服できる情緒の安定を遂げて欲しいと願ってきた。

③個々に持っている力や可能性、また、問題性等に対し、その小さな魂への心遣いとその個に合った適切な援助指導により、可能性を培い、逆に疎外されかけている子どもや主体性をなくしている子どもたちへの人間復興への願いがあった。

④私共キリスト教の幼稚園の中で隣り人を愛しましようと説く前に、私の隣り人が誰かを認識し体験することを通して、キリスト教保育の意味を見出したいと思った。

ははずむ命の塊のようなものだと思える。一歩さがると子どもの方から歩み出してくれる。それを持ち、未知のものを両手でつかみ取り、心の全部を使って友だちをおもいやれる、その時期に私たちは何をなし得るのか、もう一度じっくり考えたいものである。

今現在、子どもたちは何ができるようになったのだろうか。一

年または二年を経てきて生活習慣は殆ど良し、年長児は字を書くことへの興味が増し、これもある程度はできる、言語面は？ 体育は？ 等々……。でも子どもの、幼児の育ちというのはこんなものじやないんじやないか。今は見えないけれど、生活の中で経験した友だちとの共感、先生との触れ合い、自分たちとちょっと

違うけれど確かに友だちだと思える障害児への気持ち、先生は何もいわなかつたけれど、一生懸命にとべない飛び箱に一人で挑戦してやつととべたら、友だちと先生が走ってきて肩をたたいてニコニコしてくれたこと、それから僕は何でもできるような気持ちになれたこと、そんなことが、これから先の先にいつて、きっと生きるエネルギーになるんじゃないだらうか、たとえ幼稚園での具体的なことが忘れられてしまつても……。

(杉並教会幼稚園)

第六回みどり会夏季研修会のお知らせ

今年も「保育のこころを深めよう」と夏季合宿研修会を計画しております。詳しくは六月号本誌でお知らせいたしますが、およそ次のような予定でござります。ご参加をお待ちいたします。

日 時 八月二十二日(日) 午後一時から八月二十四日(火)
午後一時まで(二泊)

場 所 热海 ホテル岡本

人 数 三百名

分科会及び講演講師予定(順不同)

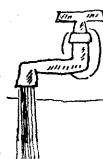
津守真先生、本田和子先生、外山滋比吉先生
太田次郎先生、立川綾子先生、勝部真長先生

森上史朗先生、外

参加費 二泊六食、会費ともおよそ 一四、〇〇〇円

三つ子の魂

(上)



外山滋比古

教育のはじまり

よく、鉄は熱いうちに打てということを申しますが、人間らしくなって行く過程を考えてみると、学校は、既に鉄が固まってしまったところで鉄をたたくようなことをしていると思います。小学校に比べますと、中学校はもっと固くなりまして、高等学校へ行きますとともに固くなってしまう。大学では全く冷たくなつておりまして、たたけばカチンカチンと音がしてハンマーがはねかえる、という位に陶冶性が落ちております。“大学”といふにも学問がありそうですが、いわば世の中をあざむくものであると思います。本当からいえば、小学校に大学校という名前をつけ

園でありますから、どういうわけか“幼稚”という言葉はろくな意味がありません。“幼稚”だというのは決してほめ言葉ではないわけです。で、“幼稚園”という名前が甚だよろしくないと思うのです。幼いころの一年、二年というものは、大人になつてからの十年、十五年にも匹敵するようなことをなしとげることができます。私は思うのです。鉄は熱いうちに打て、という諺にひっかけてみますならば、まだ溶鉱炉から出したばかりの、あめん棒のように自由に曲る鉄であろうかと思います。そういう意味で、皆さん方は、大変、大事な教育をしていらっしゃるわけあります。

しかし世の中は、本当の教育ということを考えていないところがありますて、小さな子どもには大したことはできないのだ、と決めてかかっておられます。ことに、教育を、子どもが歩いて学校

へ行かれるようになるまで保留しておくような考え方、家庭では教育はできない、生まれてから幼稚園へ行くまでは教育らしい教育はしなくてもいいのだというような考え方がある、ごく最近まで一般的でありました。これは十九世紀の貧しい社会が考えておりました『教育』であります。十九世紀の社会は、ヨーロッパでも、社会が教育に向けられる経済力その他が十分でありませんでしたので、学校はきわめて少なく、先生も限られておりました。したがって、先生の方が子どもの方へ向いて教育するようなことは、考えられません。歩けるようになった子どもが危険なく学校へ通えるようになった時に、一か所に集めまして、一人の先生がたくさんの方を一せいに教える、という現在の学校という制度が確立したわけであります。現在のように社会が教育に関心を高めていますと、当然この十九世紀のように、子どもが学校へ通うまで教育を見送ることには反省が加えられなければならぬのです。しかし長い間の習慣は恐ろしいもので、現在でもやはり、こういうふうに思いこんでいるわけであります。

そこで、人間の成長、発達ということを中心と考えて教育をもう一度反省して見ますと、小学校へ入学するまで教育ということをおろそかにしておくことは大変危険であり、勿体ないことであり、非常にまずいことであるのがわかるのであります。

最近は幼児教育ということが注目されて参りまして、これからかなり大きな、良い変化が幼児教育に見られるだらうと期待いたします。しかし正直なことを申しますと、幼稚園でも遅すぎるのであります。いつから教育を始めるのかと申しますと、生まれたその瞬間から始めなければならないであります。さらに生まれた時からでも、すでに遅いのであります。本当の教育には、生まれる前から、生まれて来る子どものためにお母さん方が心の準備をすることが、どういうふうに育てるかという勉強をすることが必要であります。昔の人は『胎教』ということを申しまして、子どもが生まれることになりますと、部屋に能面をかけたりして精神の安定をはかる、精神修養をして生まれて来る子どもが立派な子になりますようにと願つたのであります。現代においてはもちろん、能面を部屋にかけたりするのでは十分だとはいえませんが、母親がしつかりした育児に対する見識をもち、覚悟をもつているかいなかによって、その子どもの一生は大きく変わつてくるはずであります。私は、現代の教育において最も大切な問題点は、母親が一人の人間の一生を決定するような重要な時期の教育の、唯一の責任者であり、担当者であるという自覚がないということにあります。したがって、きわめて重要な問題が放置されたままになつております。これからのお母さんたちがしつかりした

自分の子どもの教育をするにはどうしたらいいかということが、早急に研究されなければならないと思います。しかし、その実現には、長い時間が必要であるとも思います。

子どもの、子どもばかりではなく人間の基本的な教育としましては、母親が子どもをひざの上であやしながら行う教育が、ほかのとは比べものにならないくらい重要であります。このお母さんたちがそのための教職の単位もとつておりませんし、教育実習もしていないような先生で、ありながら子どもを育てているわけで、この結果がうまくいくとすれば偶然であります。もう一つは非常に愛情があるために、素質も、資格も、経験もないのを補つて何とか大過なきを得ておられます。大学でいろいろなことを勉強されたような若い女性にしても、育児と関係のないようなことはよくご存知ですが、生まれたばかりの赤ん坊に最初にどういう日本語を使つたらいいかということを知つてゐる、あるいはそれを考へたお母さんは、残念ながら一万人に何人、ぐらうしかいらっしゃらないのではないかと思います。大学で国文学を卒業されて源氏物語の教語というようなことには詳しい研究をされたような人でも、赤ん坊の父親に“パパ”というような言葉を使って平氣でしよう。とすれば、少なくとも子どものための日本語の先生としては、不適格であるかもしけないということにな

るのであります。なぜペペがいけないかということはあとで申しますが、ママはよろしいのですが、ペペがいけない、いけないということを感じないというのは、そのお母さんの日本語の語感がおかしいからであります。そういうお母さんが赤ん坊に日本語をしゃべりかければ、赤ん坊の日本語がおかしくなつてくるのは当然であります。

言葉の教育によつて人間的形成ができるとすれば、人間の形成の基本的なところでかなり欠けているということを認識した上で、少し手遅れではありますが、幼稚園で直していくことができる、子どもたちにとって将来最も感謝すべきは、母親よりも幼稚園の先生であったということになるかもしません。

三つ子の魂——母乳語

人間を決定するような教育というのは一体何であるかなどといふと、非常に難しいような感じをもたれるかもしませんが、そうではないのであります。簡単なことでわれわれの一生が決まつてしまふ。それが“三つ子の魂”というものです。“三つ子の魂”という言葉もどこか古風でありますが、人間の一生について回る個性とか、人間の中核的な考え方というようなものだと言つても

よいのです。

あえて、三つ子の魂ということで話を進めていきたいと思います。

生まれてきました赤ん坊は、何も言葉を聞いたことがないわけです。そして、生まれた瞬間からいろいろな音や声がきこえてくるわけです。自動車のクラクションもテレビの音も、雨戸を閉める音も人間の声も、区別ができないであります。そのうちに、人間の声と物音とが区別できるようになります。そこは人間の能力が非常に高いからであります。普通の機械ですとこの区別は困難であります。非常にうるさい、地下鉄のような所で友だちと話をします。話はできます。それを録音してあとで聞いてみますと、まるで会話が聞きとれないのであります。なぜかという

と、テープレコーダーは電車のうるさい音と人間の声を同じように録音しているからです。ところがわれわれの耳は、モーターの音や騒音というものをおさえて、相手の話している言葉を拡大して聞いております。こういう情報を選別する能力というのが人間にはあるわけです。その能力は赤ん坊のころからだんだん発達します。その中でもお母さんの声をまず最初に認識します。そこでお母さんのいうことに特別な関心を示します。このお母さんと赤ん坊の間に見られる会話、これが人間の言葉の教育の最初の入門期なのであります。したがってこれを私は“母乳の言葉”といふふうに呼んでおります。生まれると赤ん坊は、母乳をもらってどんどん体が大きくなっています。体が大きくなるだけでは動物的な成長であって、これが精神的に、知的に成長していくには、母乳だけではだめで、心の糧が必要であります。これが言葉であります。誰の言葉がいいのかといいますと、やはりお母さんの言葉がいいのです。子どもはメキメキと言葉の能力、感覚を高めています。それで人間らしくなっていきますから、これを母乳語といいます。という名前でよびます。

惣領の甚六

どうせお母さんが子どもに話しかけるのなら、赤ん坊のためになる、赤ん坊に好都合な言葉をしゃべった方がいいのではないかと思います。この母親が乳幼児と交す言葉の研究が非常におくれていまして、どういう言葉をお母さんは赤ん坊にしゃべればいいかということがよくわかつております。しかしお母さんは一人、三人と子どもを育てますと、だんだん上手になります。未経験な母親の子どもは被害をうけるわけです。昔の人はそれを“総領の甚六”といいました。若い親の子どもは成熟していないから抜けて

いるんだということを考えていました。が、これは間違いで、お母さんの経験が無いために母乳の言葉、心の糧が不足しますから、いつまでたっても精神的発達が進まない、おくれるわけです。昔からそういうことはかなりあった。ただ最初の子どもが女の子ですと割合にうまくゆくので、昔から「一姫二太郎」といふ。これは一人の女の子、二人の男の子とどる人もあるようですが、私は、最初女の子で次が男の子とどる方がいいように思いました。男の子は女の母親からうける言葉になじまないのでしょうか。男の子は病気にかかりやすくまた治りにくい。言葉をしゃべるのが遅い、女の子はおしゃべりだから早くしゃべるというようなことを言っていますが、なぜおしゃべりになつたかといふと、小さい時の教育が、早く母乳語をたくさん取つて、その母乳語が女の言葉であるために女性にはプラスになる。だからといって、女の子の方が男の子より早くしゃべるようになります。甚子さんがあまりできないというのは、お母さんと娘の間では言葉の教育が割合によくよくからでしょう。

ソ連では託児所が発達しております。働くお母さんたちはそこへ子どもを預けて働いているわけであります。その託児所は衛生的に完備しております。普通の家庭では見られないような設備だそうです。ところがその託児所の子どもは一般的の子どもよりもはるかに

病気にかかりやすい。そしてかかるとなおりにくい。こういう衛生的なところに子どもをおいておけば病気にならない、のではなくて、子どもにはもっと愛情、心の糧を与えて精神を安定にする必要がある。母親のところへ行きたいという気持ちをおこさせないで、みち足りた精神生活をおくらせれば抵抗力も強くなつて、病気になりにくいのです。かりにいくらかばい菌のあるような所においても病気にかかりにくく、かかつた病気もじきになれる。ところが精神的なものが欠如しているところに育つと弱くなるわけです。

男の子、ことに総領の男の子が甚六ぐらいですんでいればまだいい方であります。ひょっとするとお母さんの育て方が悪くて死んでしまう子がたくさんあるはずです。生き残ったのが甚六、というわけです。昔のように子どもが十人も一ダースもあれば、最初の方が三振してもあとでとりかえせば打率七割ぐらいのいいお母さんになれるかもしれません。しかし最近のように子どもの数が一人か二人、三人となりますと、最初失敗したら二人の場合は五〇%、もし一人の場合は一〇〇%失敗になります。昔よりもお母さん方の研究は大事であります。

幼稚園においても先生は大部分が女性であります。したがつて男の子が入ってきた時に男の子と先生の間に一種の緊張感がある

はずであります。そのことについて現在の幼稚園の教育がどの程度の配慮を払っていらっしゃるか、先生方がどういう研究や努力をしていらっしゃるか、私は存じませんが、母親のところですでに男の子はかなりひどい目にあっているのです。幼稚園に来たらまたその母親の代理みたいな人がいて、どうもあまりピッタリしない、しかし女の先生は男の子を非常にかわいがりますから、それで教われているのです。

栄養のある母乳語

さて同じお母さんの言葉でも、栄養のある言葉と栄養のすくない言葉があります。大きくなつて俗に頭のいい子といわれる子どもは、栄養の高い母乳語をたくさん聞いてきている子どもであります。ただのおしゃべりのお母さんでは賢い子どもが育たないのは、おしゃべりに栄養がなければ、馬がわらを食べているようなもので、腹はふくれても栄養にならないのです。どういう言葉を子どもに話してやれば栄養の高い言葉なのか、これは非常に難しいところであります。そしてそれがその子どもの将来の才能を決定してしまいます。この点で最近困ったことは、お母さんたちの教育的水準があがってきたということです。元来ならばこれは喜

ぶべき現象であります。母乳語の先生としてのお母さんを考えますと、形式的学校教育の水準が高まつたということは、子どもにとってまずいことであります。なぜかといいますと、昔のお母さんが決して口にしなかつたような言葉を、今のお母さんは平気で口にします。“結論的には”とか“主体性”だとか“何とか主義”だとか、こんな言葉は赤ん坊にとって全く意味がないのであります。赤ん坊にとって栄養価が高いのは“おいしい”とか“まるい”とか“まがつて”とかの“耳の言葉”でなければなりません。ところが学校では難しい漢字のたくさん書いてある本を読んで勉強いたします。そういう勉強の期間が長くなればなるほど、しらずしらずしゃべる言葉の中に“目の言葉”、観念的な言葉がまじってきます。赤ん坊は字を読むことはできないのですから、どんなに意味があつても目で見なければわからない言葉は騒音と同じであります。ところがお母さんたちは、自分たちは教育を受けているんだから、知識があるんだから、という誇りがあります。目の言葉に関しての反省はありません。それで今の子どもは、昔の子どもより不幸であるといえると思います。ことに高等教育を受けたお母さん方は、栄養価の高い母乳語とは何であるかということに真剣にとりくまないと、折角の自分の教養があだになってしまいます。

言葉を覚えるということ

言葉というのはどうして覚えられるのかということをついでに申し上げておきます。言葉というのは、言葉の中に意味があるのではないです。言葉に意味があるのですが、初めから意味をもつてゐるわけではありません。どんなに頭がよくても一回で言葉を覚えた人というのはかつて存在しないのです。言葉はくりかえしによって覚えます。赤ん坊が二年くらいの間言葉を使えないのは、そのくりかえしの回数が十分多くなるのに時間がかかるからであります。たとえば、ママとペペという言葉を覚えるのには、これは一番早いと思いますが、何百回もこれをくりかえして聞かせますと、これが何かをさすらしいということがわかつてきて

"ママ" というとママの方を向くようになります。大人になりますと一度きいたことをすぐ記憶するということがあります、これはたくさんの言葉を知つていて、その言葉を関係づけるからわかるのです。外国、たとえばアフリカのタンザニアへ行って最初にきいた言葉を "あれは何という意味ですか" と聞かれてわかる人がいたら、それはお化けです。しかしながらくともその国に六か月いれば大抵の人はその国の言葉を覚えてしまいます。こと

に子どもですと六か月すると完全に言葉を覚えますが、それはその国に必要な頻度、くり返しがあるからであります。

したがつてお母さんが言葉をあれこれふらふらさせていたらだめなのです。玩具もあまりいろいろなものを買い与えてはいけないといいますが、あれも玩具は大人はひと目見ればこれは何であるかわかりますが、子どもには、毎日毎日同じものをながめて、そのくり返しがだんだん重なつてくると、これは太鼓であるなどいうことがだんだんわかつてくるのです。それが十分まだ頭に入らないうちにそれをとつて新しい玩具をやれば、いつも混乱して、な定着しないわけです。言葉を教える場合もそうでありまして、なるべくたくさん言葉を教えればいいと思つて新しい言葉をあれこれ与えますと、必要なくくりかえしに達しない。するとその子どもは言葉をしゃべるのがおくれてしまします。

しゃべるのが遅れるというのは、その時点において知能にある遅れがあるということを示しておりますから、これは相当重大であります。なぜそうなつてしまつたか。先天的ではなくて後天的に言葉の教育が間違つてゐるからです。お母さん方は生まれたばかりの赤ん坊に自然に口にできるような言葉を、一日に十ぐらいの言葉をくり返しくり返し使つていたら、まず二年以内に必ず言葉がいえるようになるはずであります。赤ん坊はくり返しの多い

言葉から覚えていきますから、そして最初に覚えた言葉ほど重要性が高いのですから。テレビをつけておきますと、周期的に同じコマーシャルがきこえますが、赤ん坊はこの世の中で一番大事な言葉は“何とかラーメン”“何とかコーヒー”だというようなことを考えて、致し方がないのです。

このくり返しということは努力なくしてはなかなかできることではありませんが、普通は母親が一番くり返しをよくやります。これは子どもがかわいいからであります。もっとも子どもが大きくなりましてもまだ同じことをくり返しておりますから、子どもから“うるさい、お母さん同じことばっかり、もうわかった”といわれる。が、そういうおかげで子どもは育てられたのです。くり返しをうるさがるなどというのは罰当たりであります。

慣用——言葉の意味づけ

しかし言葉は一にも二にもくり返し、くり返せばいいというので、朝から晩まで“まんま、まんま、まんま”といつていたって、これは騒音みたいになってしまいます。適当に間をおいてくり返さなくちゃいけません。一日に何回かやるというように時間をかけなくてはいけません。くり返している間に慣用ということがで

きます。この慣用ができた時にその子どもにとって言葉は意味を持つようになります。“言葉”というのは初めから意味があるのでなく慣用によって言葉がわかり、その言葉には意味がついてくるわけです。かりにここで人造的に“ボコボコペッ”という言葉を作ったとします。ある家庭で“ボコボコペッ”といったらご飯ですよ」ときめておきます。そして毎日“ボコボコペッ”とくり返していますと、その内に子どもは“ボコボコペッ”というと唾液が出てきて腹がへった、というふうになります。それもやつぱり十回や十五回じやだめで、一年も二年もいつてますと、それはよその家庭では何も意味をなしませんが、その家庭では“ボコボコペッ”といえば“あ、ご飯だな”とすぐわかります。“いわしの頭も信心から”と申しますが、いわしの頭を玄関の所へつるしておく、いわしの頭はいわしの頭です。しかしこれを毎日見て何となくありがたいような気持ちで眺めておりますと、このいわしの頭にも慣用ができる、そのうちにいわしの頭を見ると何となく神秘的な感じがして、神さまか何か宿っているんじやないかというような気持ちになります。

よくしつけを大事にしなくてはいけないといいます。しつけといつても一ぺんでアイロンをかけるようなしつけもできますが、昔の人のしつけというのは、へらで何回も何回もくせをつける、

一種の慣用をつくることです。

先ほどちょっと "ペペ" という言葉はよろしくないと申します。なぜいけないかということを申します。"ペ・ペ" という言葉は破裂音であります。日本語は長い間この破裂音、ペビブベボは使いませんでした。なぜなかつたかというのは大変興味ある別の問題ですが、外国語が影響を与えるようになつてこのペビブベボが入つてまいりました。日本語としてはいわば新参の音であります。辞書を引いてみると、ペで始まる言葉にろくな言葉がありません。ペア、ペクル、ペサベサ、

パンパン、ペチパチ、ペッパッとか、感じはよく出ますが日本人にははしたない、落ち着きのない、安定性の欠けた感じがします。そういうえはペペというのは、朝いたかと思えばペッとどこかへ行つもやう、夕方来るとバッとまた寝ちやう。ペッペッと消えちやう。大きくなつてから父親との心の交流をはからなくちやいけないなどということをいつても空々しいわけであります。三つ子の魂で父親はもう否定されちやつています。ペッペッ、いなくともよろしいということです。これは教育上よろしくないのです。道徳教育としてでなく言語教育としてもよろしくない。その上に子どもは割合音に敏感であります。昔からあんまり子供をおどかしてはいけない、虫がひきつけるとかいわれています。

ところが言葉の中で一番おどかすのは破裂音です。ですから小さい子どもと隠れん坊をする時 "いないないバ、バーッ" という人はいません。"いないないバ、アーッ" です。"ベアーッ" というのはおだやかで、破裂音としてもソフトな音です。昔の人たちは理屈は知らなかつたのですが "いないないバアー" といったのはよろしいことです。ですから私は "ペペ" よりも "ペペ" の方がいいと思いますが "ペペ" というのは既に存在するものなので、ちょっと困ります。

(一九七五・七 日本幼稚園協会夏期講習会講演より)



椿と私

——津山尚先生に聞く——



編集会議で、「春の花によせて」ということで津山尚先生（お茶の水女子大学・植物学）に何か春らしいものを書いていただこうということになり、ある日研究室へお願いにあがりました。訪問の主旨を聞き終えられた先生は、「僕は専門の仕事以外の原稿は書かないことにしているのですけれども、お話を聞いたましょ。録音して原稿になさるのならかまいません。しかしその題では気が進みませんね。春だからといって概念的に、それ花だといふには抵抗を感じます。花も生きものです。植物は生きものです。生まれて、育つて、死んでいく、その一生を通じてみなければ本当のことがわからないのは、人間をふくんだ生物もみな同じでしよう。はなやかな時だけに目を向けるのではなくて、その一生の終りまでずっと見るのが本当でしよう。春だ、それ花だという発想では、イメージがわきませんね」と、言われました。

考えてみれば全くそのとおりであり、その言葉の中に、津山先生の植物に対するいくつしみの気持ちを感じたことでした。そして、御退官間近い先生に、長い研究生活で感じられた植物への思いの一端でも、ぜひうかがわせていただきたいという気持ちがつのりました。先生も、そんなことをおっしゃりながらも、「それでは、『椿と私』なんていふことによければ」と、興味ある話をきかせてくださいましたので、御紹介いたします。

津山尚先生は、椿の研究では世界的に有名でいらっしゃいます。

(編集部)

椿との出合い

何でも研究のきっかけというものがあります。それは、意図されたものもあるし、偶然ということもあります。椿と私に関しては、全くの偶然なのです。それは、こういうことです。

私は広島で当時の高等師範の付属小学校を出ましたが、そこで六年間お世話になった担任の相沢先生は、すばらしい先生で、高等学校、大学、大学院の時も、ずっと親しくお教えいただいていました。幅の広い先生で、皆からとてもなつかしまっていました。それで、新潟の御郷里に隠退されてからも、時々みんなで、あるいは個人で先生を訪れました。六〇〇メートル位の本当の山奥の水梨という所です。冬は数メートルの豪雪地です。

終戦後まもなくある年の四月だったと思います。軽便鉄道に乗り、さらにバスに乗りついで先生のお宅へ向う途中でした。雪国の春ですから、まだ雪の堆積がバスの両側の所々に見られるし、森の床面にも雪がとけ残っているわけです。バスにゆられながらいくと、林の中に赤い花が咲いているのがチラリと見えたのです。直感的に椿だと思ったのですが、

たのですが、私のイメージでは、また当時の多くの植物学者のイメージでは、椿というのは南の暖国の中だとされていたのです。椿といえば大島の油売りの乙女とか、八丈島や室戸岬の椿とかが思い出されて、こんなに雪の深い所にあるのが非常に不思議だと思ったのです。

その時ハッと思いついたことは、その前の年でしたか、当時の東大の教授であった本田正次先生が、岩手県の猿巒——猿しか登れないような岩山という意味でしょうか——で新しい椿を発見して、当時まだ学会誌が回復していないかったので、小さな雑誌に発表されたわけです。称してサルイワツバキと命名されたのですが、そのことを思い出し、あるいはと思ったのです。

バスはどんどん進みます。しばらくすると、また赤い花が窓辺を過ぎ去つて行きました。もうためらいは許されません。運転手さんに手短かに事情を話して「止めてください」と叫ぶように頼みました。「じゃあ、お客様の同意を得てください」との応答。すぐお客様の方に向きなおつて、こういうわけだから、一分間だけでも止めてくださいと頼みました。バスは止りました。泥んこの雪道を数十メートル走りもどつて取つて来たのは、まさにサルイワツ

バキでした。当時はまだ戦後で、実際に猿岩まで行くのは困難でしたから、文献でしか知らなかつたわけですが、まさしく本田先生が見つけられたサルイワツバキと同じものでした。

岩手県の猿岩にしかないといわれていたものが、ま

新潟県にもあつた、その発見はうれしかつたですね。

それを私は大事に手に持つて、花弁が散らないように、

そつと相沢先生のお宅までいったのです。そして先生に

「こんなめずらしいものを発見しました」と、得々として

話しますと、「なんだ君、そんなものいくらでもあるよ。

すぐに案内しよう」と、先生の持ち山である裏山へ行きました。大きなブナ林です。その下にはササも生えていましたが、椿の大群落なんです。雪が部分的にとけたところから、雪におさえつけられていた枝が立ち上つて、ボソボソと咲いています。「これ、君、そんなに面白いものか」と言われました。

帰途信濃川の方に下りて来まして、十日町——十日町紬で有名な織物の中心地で、雪が非常に多い所ですが——この家なみを見てみると、町家の玄関先や庭先に、何げなく椿が植えてある。それが全部、バスで見つけた椿、相沢先生の裏山の椿、すなわち本田先生が猿岩にしかないと

言われためずらしい椿か、またはその系統の園芸品種だつたのです。

猿岩にしかないと言われた椿が、ここにはこんなに沢山ある。どうしてだろう。しかも椿は暖国のものだと思つていたのに、こんなに雪深い所にあるのはなぜだろう。

これが、私が椿に出合い、椿の研究をはじめたきっかけです。

ヤブツバキとの相違

ここでもちよつと、この椿と今までよく知られている椿——ヤブツバキと言います——との目立つ相違を説明します。一番の特徴はオシベで、ヤブツバキのオシベは筒型になつていますが、サルイワツバキのオシベは下の方だけくつついて、上の方は離れて広がつています。ですから、この点は一見ザンカに似て見えます。それからサルイワツバキのオシベの細い所、花糸といいますが、それがヤブツバキの白色とは違つて、まつ黄色、カドミウムイエローなのです。また、サルイワツバキの新葉の柄には絹糸状に光る毛がありますが、ヤブツバキの葉にはそれが一本もありません。

身のまわりのものには案外無関心であること

ところで話はかわりますが、「すみ焼長者」という物語

を御存知ですか。柳田国男先生が発掘された話ですが、日本中のあちこちに似たような話があるのです。一ヵ所だけにそういう民話があるのなら、日本人全体の問題ではあり得ないのですが、似たような話が遠くはなれた地方の民衆に語りつがれているということに、意味があるので。

田舎に一人の貧乏なすみ焼の男が住んでいました。毎日

毎日すみを焼いてやっと生きている。山の草を取って食べ、たまには鳥もとるが、えものはないし、網もありはしない、石を投げて百に一つもあたればよい位でした。ある日突然ここに都から美しいおひいさまが、おしけ女房にやつて来ました。そこでどんなやりとりがあったのか、その機微はわかりませんが、とにかく一緒に暮すようになつたわけです。ある日おひいさまがひょいと見ると、夫が石を投げては鳥を落そうとしているのです。よく見ると、石がキラキラ光っているではありませんか。金なのです。しかしすみ焼はそれを知らない。「あなた、これは大変なものですよ」「いや、こんなものなら、この辺にいくらでも

あるよ」というあります。そこではじめて光る石の価値がわかり、その男はすみ焼長者と言われるほどの者になつたという話です。

柳田先生はどう解釈しておられたか私は知りませんが、水梨の椿の山に入つてこの話を思い出しました。身のまわりに沢山あるものは、それこそ日常茶飯のことで、そのものの真の価値はわかりにくい。これを別の視点から見ればそこに新しい評価があり得るということでしょうか。

ユキツバキという呼称

この椿が植物学者の間で知られていなかつたのはなぜかというと、こういうことだと思うのです。

日本に生えてくる植物は非常によく調べられております。だからめずらしいものが発見されるとすぐにその地方の先生との連絡網を通じて、研究者の手に入るようになります。ところがこの話の場合は、土地の人は小さい時からこの椿になじんでいて、何の疑問も感じていないわけです。もし普通の椿ではないと思えば当然問題になつていたわけでしょうが、ただの椿だというのが先入主になつっていたのですね。

私たちにはヒマラヤに行って新しいものを見つける。これはあたりまえですけれど、足もとにあるもの、さつきのすみ焼長者じやありませんけど、身近にある、普通のものの研究は案外ぬかっているのではないか。落ち着いて見ればいくらでも研究の対象はあるものだと思います。

ところで、植物学者は知らなかつたけれども、さすがに林学者は知つていましたね。実際に山を歩いているんだから、これは普通の椿と違うことをちゃんと知つていて、「ユキツバキ」と呼んでいました。私は林学者の名譽のためにも、また雪深い国で咲く椿にまことにふさわしい名前であるゆえにも、この「ユキツバキ」を正式な名前として採用しました。今では全世界に、*Show Camellia* で通っています。

一方ユキツバキの分布は、自分でも歩いたし、人の援助もうけて研究したわけありますけれども、それは山手にあるのです。およそ三〇〇メートルから一、〇〇〇メートル位の日本海側に傾斜した山地、それは積雪量が多い所というわけです。猿岩というのは岩手県ですから太平洋側のようにみえますけれども、そこだけはちょうど中央山脈が切れいて、その切れ目から雪が吹き込んで来る所にあたっています。そこだけは位置の上からは太平洋側であります。それからずつても、実質的には日本海気候が支配しているのです。サルイワツバキ（ユキツバキ）の最初の発見地はこのように

青森県の北の端まである。北の方は分布が断続的になり、青森県の椿山というところ、ここには椿にまつわる悲恋物語がありますが、そこで終っています。一方日本海岸側には対島、佐渡などをふくんだ中国地方からずっと富山県あたりまで、また新潟から秋田、青森県の海岸にボツボツと分布しているんです。従つて、ヤブツバキは日本列島の南からハサミではさむようにして、四国、九州を元とすると、太平洋岸は太い刃で、日本海岸は細い刃ではさんでいると見えましょう。

ユキツバキとヤブツバキの分布

その後研究をしてだんだんわかってきたのですが、分布から見ますと南の方は全部普通のヤブツバキなのです。九州、中國地方から中部地方——しかしあまり山の奥の方ではありません。椿には寒すぎるのです。それからずつといきまして、関東地方から太平洋岸にそって宮城県、岩

非常に特殊な地点だったわけです。

ユキツバキのこと

椿は暖かい所が好きだと一般的に思われています。それは本当です。実際にユキツバキだって暖かい所が好きなのです。どういう暖かさかと言いますと、積雪何メートルの雪の下の暖かさを求めているのです。

雪の下は暖かいのですね。山形県には雪菜といつてわざわざ雪の下で栽培する野菜があります。冬でも凍らないで軟らかく生育します。雪の下は風が吹いても寒くはない。氣化熱がうばわれないためです。それに植物も生きるため呼吸をしていますから呼吸熱ができる。雪のカバーでそれが逃げないです。それで雪の下は暖かい。

こういう所に生えているのですからユキツバキは雪の重さにたえる力があります。長いこと豪雪地方の雪の下になつてゐるわけですが、この圧力は大変なものですね。そのため枝も葉も地面にペシャンコに押しつけられます。それでもユキツバキは平気なのです。中にある纖維が長くて、枝は非常にしなやかなのです。だから春になつたらどうでしょう。雪がとけるに従つてピンとはねあがるので

す。折れたまっていた葉も何の障害もなく、もと通りに平らにもどってしまいます。ヤブツバキの方はそういうわけにはいきません。日本海側の方に住んでいる方でも、ヤブツバキのなかなか良い品種があるから、買って植えたくなる。植えるとどういうことになるかといふと、沢山雪が降り積ると、その巨大な圧力で枝葉がバラバラに折れてしまします。新潟ではこの惨状を「ちょうちんだたみ」と言つています。だからヤブツバキには、冬に入る前に非常に嚴重なスノーシェルターが必要なんですね。しかしユキツバキは平気です。どんなに雪でペシャンコになつていても、春になつて雪がとけるに従つて起き上り、可憐な花を、まだ雪のとけ残つてある山や町で咲かせるのです。

私の椿の研究の全部を今ここでお話しする時間がないのが残念ですが、それにしても、あのバスの中で見た椿が私を椿の研究にひきこんでいたのも、因縁というほかはありません。しかし、椿ばかりを研究しているわけじやありません。私、津山というと椿と思われてしまいがちですけれども、椿だけじゃやっていけませんよね。でも、椿が好きなことは、それはもう本当のことですが。

教科研究における保育の授業の展開（二）

磯 部 景 子

子どもはどのような世界に生んでいるのでしょうか。子どもは

○

何をどのように感じ、何をどのように考えているのでしょうか。先回は家庭科研究の保育の授業を子どもの世界について思いめぐらすことからはじめることについて述べました。そして「子どもはどんな世界に生んでいますか？」ということばをきいて、思いうかんだことを書いてもらい、その中から例をあげましたが、今回もひきついでその資料の中からいくつかの例をあげることにいたします。

可能性をためす

人間は、はじめは、だれでも真白な紙の状態で生まれてくるのであり、子どもの紙の上には、まだ書いてあるもののが少ない。子どもは未知の世界と現実の世界とを自由に行き来できるし、このふたつの世界を行き来することにより、少しづつ、自分の住む世界を広げていくのだと思う。

（幼児教育 N・M）

広がりつつある世界

子どもの世界は子ども自身を中心とした円と考えることができる。そして年齢の長ずるに従って、その円を同心円として広がってゆく。

（国語 M・F）

青年期の自我といったものではないが、自分というものを中心に、無意識の中での自分の可能性をためす。たとえば、赤ちゃんが、ある日、手を発見し、動かしてみて、何かをつかむ。手が動く。便利なものだと思う（赤ちゃん自身が思うかどうかはわからぬ）。このような感じの可能性の発見の毎日である。それは、いろんな質問やいろいろな行動になつてあらわれてくる。

(不明)

動きのある世界

子どもは、あらゆる事に興味を持つていて、彼らが住んでいる世界は、子どもが動きまわるという意味だけではなく、子どもが住んでいる世界そのものが、動きのある世界だと思う。

(幼稚教育 T・T)

広い世界

おとなは鏡の中をのぞいて、そこにはうつる世界に子どもが住んでいると思っているが、そうではなくて、子どもは鏡にうつる世界にとても似ているけれど、それ以上に本物の世界に住んでいる。子どもの世界はおとなが見る子どもの世界よりも、もっと広く深いもの。

(心理学 M・T)

子どもの世界は限りなく広いものだと思う。おとなには、まるで思いつかないことを当然のことのように考へるのはない。

(心理学 Y・K)

とはないだろう。自然のなかで、自分たちだけのまったく別の新しい世界を創り出してあそぶ子どもたちに魅力を感じるのである。子どもたちは、魔法とか、秘密とかが好きです。そして現実と違った新しい世界をそこに見つけ、すぐに、そこにスムーズに入りこんでいく。

(国語 F・A)



子どもは知らないことが沢山あり、経験も乏しいので、狭い世界にすんでいると思われる。しかし、空想という世界をもつてゐるという面では、無限に広い。私たちよりも、ずっと大きな世界にすんでいると思われる。

鳥とも花とも話すことができる、夢に満ちた世界にすんでいると思う。

(数学 T・H)

自然の草木やおもちゃなどを全部、自分の仲間とし、それらと自由に接触でき、想像の世界が広がっている。また私たちのように、すべて、時間によつて動くのではなく、時間とは関係なく、自由に行動する世界をもつていて。

(音楽 A・K)

おとの世界よりも、もっと、もっと広い世界の中に住んでいる。



とても広い無限の世界。子どもにとって、不可能と思われるこ



る。

子どもの世界には夢があり、無限の空想がある。

どんなことも、素直に受けとめる心のある世界。

(音楽 A・Y)

常識などといわれるものに、まったく無関心な世界に住んでいて、自分の感情、感覚を大切にし、それを育てるべき存在であること。あらゆる可能性を秘めていて、思ったことを素直に表現できる時代である。ひとつめの閉じこめられた世界からみ出されている。

(哲学 I・T)

空や海などに象徴できる大きな広い世界。

(幼稚教育 K・S)

花を見れば「お花が笑っているよ」とうれしそうに言い、犬や小鳥と、ほんとうに話をしているなど、おとなになくなってしまった世界に住んでいるような気がする。

そして、こちらの状態を、例えば、機嫌が良いとか、悪いとかを鋭く感じとなるなど、ものごとを見抜くものをもつてている。

純粹ではあるが、反対に、何か恐ろしいような世界にも住んでいる。

(国語 H・O)

子どもの世界はおとの物語ではかれない。おとなでは考えられないものを持つている。私たちが入ろうとしても、無理のようである。それなのに、子どもは大きくなるにつれて、その世界からすばり出して、その世界をしだいに忘れていくてしまう。

子どもがどんな世界に住んでいるか、おとなにはなかなか理解できない。おとの眼では、何か型にはまつた、お決まりのものでしかおもちゃを眺められないが、子どもといっしょにいると、おとなには全く思いもつかないことが、子どもにとっては喜びで

(国語 M・H)

子どもは、特に、自分自身を中心とする世界（おとなもそうであるが）に住んでいると思います。そして、純粋に物をみつめる世界にいると思うのです。ほんのちょっととしたことに感動したり、感激したりするような、私たちが、忘れてしまった世界かもしれません。



おとなとはちがう子ども独自の世界
おとなが忘れてしまった世界



あつたりする。

(不 明)

(幼児教育 Y・F)

子どもたちの背は低い。だから目の位置は、私たちより一メートルほど下にあり、彼らの視覚による世界は私たちと、かなり違った感じだと思う。また目にみるものすべてが、私たちの見るおおきさより大きく思われる気がする。

子どもたちには宝がある。私たちがどうでもいいものを宝にする。周囲のすべてのものに、私たちと違った価値観をみいだす。

(数学 E・H)

子どもは、精神的にまったく自由な世界にいると思う。現実と空想の世界を往々來して、おとなしいもよらないことを発明したり行ったりする。子どもひとりひとりの世界の広がりは、それぞれ大きく異なっているのではないかと思う。(国語 M・O)

ドン・キホーテのように風車を見て、怪物だと思うように、お

とながみたら何の関連もないのに、物を擬人化し、また、そのものがたかも動いたり、しゃべっているような想像をする。現在のおとなたちが忘れているものを子どもたちは行動によって示してくれる。

(化学 Y・H)

子どもとおとなとは、現実には、同じ世界に住んではいるが、子どもは、おとなのはいりこむことのできない、子ども自身の世界を持つてはいると思う。(音楽 M・M)

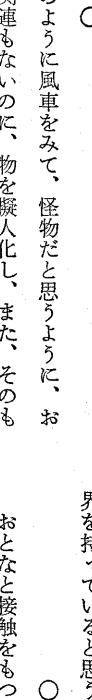
子どもひとりひとりの世界

子ども自身の世界

子どもにとっては、いろいろなものが未知である。子どもには自分なりの想像によつて、それぞれの世界があると思う。

子どもは自由で、かつ、創造的な世界に住んでいる。創造的な世界というのは、自分でいろいろなものを作り出して、遊びの世界をつくるからである。私たちにはつまらないものに見えるもの

(音楽 R・M)



でも、子どもたちにとっては、すばらしいものとなるからである。

また、子どもは、自分だけの世界にも住んでいる。そして、何かに夢中になると、こちらのいっていることも全くわからなくなる、一生懸命やっている。

(美術 M・T)

女の子にとっては、人形はまさに息をしていて、生きているものとしてとらえられ、男の子は、紙飛行機を飛ばして、紙飛行機とともに実際に空を飛んでいるのである。

(不明)

乗り物の好きな子どもは乗り物の、動物の好きな子どもは動物の沢山いる世界を持っている。

(不明)

自分がけの個性的な解釈をすることができる。それは他人からあたえられたものでないだけに価値が大きい。(数学 Y・Y)

空想・想像・創造

子どもは常に創造的な世界に住んでいる。空想することが好きで童話を読んで聞かせると、自分がその話の中の主人公になつたつもりになり、すぐに、その話の中へ自分を移しかえること

とができる。

(数学 M・Y)

子どもにとって現実と空想、または夢がはつきり分化できないと思う。そのため、昨晩みた夢と現実をとりまぜて、まるでそのことが現におこったようにおとなに話す。

絵本でみたこと、まんがで読んだことが、そのまま現実におこるかのように、その主人公のまねをして、高いところからとびおりたり、木に登ったりする。

(幼児教育 M・K)

感じる世界

無限の未知の世界。そしてそれは、自分の完成されていない部分においていろいろな可能性を持たせる。感情の豊かな、何にも拘束されない世界で、拘束されるとするなら、それは子どもたちだけの世界における捷によってであり、それも、自由でたのしいものであろう。無心に物を見て、考えて、何よりも感じる世界に住んでいる。

(美術 K・S)

子どもの世界は、なにもかもが彼らの冒險の対象になるのではないかと思います。例えばおとなから見れば、ただのへいのこわれた穴でも、それをくぐれば何かがあるようなそんな気がするの

だと思います。子どもは砂をにぎって、こぼして、そんな何でもないことに喜びを感じられる世界にいるのだと思います。

(幼稚教育 A・W)

残酷

子どもは夢のある世界にすんでいると思います。また、子ども的一面として非常に残酷な面をもちあわせてています。ちょうどよの羽根をむしったり、蟻を踏み殺したりすることも平気なことです。

(幼稚教育 Y・S)

主観的な世界。自分が幸せなとき、周囲の人々はみんな幸せであり、自分が不幸であったり、不愉快なときは、周囲もそう見えます。イメージが独創的である。絶対的にすぐれた者として、おとなにあこがれる。やさしいところもあつたり、残酷であつたりする。

(数学 H・O)

子どもと時間

子どもの動作が、あまりにも短時間で変化することは、子どもの世界というものは、時間の回転が速いのか。

(数学 S・K)



(愛知教育大学)

私たちの一日の時間を彼らは計りしれない程の時間に置きかえてしまう。

○

時間のたつのがおそい。おとながひとつのことやりとげる間に十のことをやってしまう。エネルギーな世界。(不明)

○

純粹さがある。ものごとを見る時、いつも新鮮な感動をもつてみると、素直にものをみつめる。一日一日を新しい世界のできい」として体験し、一日がとても長い。

○

どろんこあそびや砂あそびなどで、小さな砂山に山を想像したりして、空想力がゆたかである。

(美術 T・A)

子どもにとっての世界は、限りなく、永遠で、未来への希望に満ちた世界である。

(史学 M・O)

(つづく)

乳児期の母子関係

—Attachmentの形成を中心にして—（前編）

岡野雅子

序

子どもにとって「母親」とは一体何であろうか。「母親」とは子どもにとってどのような意味をもつものであろうか。

この問に対しても、従来の研究から明らかにされているように、母子関係は、その初期の結びつきのあり方が重要であって、それは子どもの精神発達に大きく影響を及ぼすものであるよう

である。人間の新生児の場合には、他の動物とは異って、非常に無力で生まれてきて受身的な存在があるので、特定な人すなわち母親への特殊な結びつきが形成されることは精神発達の上で重要な現象であろうと思われる。

目的

乳児期における母親と子どもの結びつきの一つの特徴的現象である attachment の形成を、家庭児を対象として探る。

方法

(1) 調査方法 母親との面接による面接法

ちなみに、母親と子どもの結びつきの形成の始まりは胎児期であるが、その後出産して母親と子どもは分離する。そして、両者が結びつきを回復し、母親と子どもが相互作用を形成し保持してゆくプロセスが母子関係には最も基礎的な問題であろう。」

○対象児は一三〇名すべて家庭で養育されている。ただし、母

親が仕事をもつてている場合は、保育園などへ通園している子どもも含まれている。

対象児の年齢を四分の一年に区切ると表一の通りである。

attachment の形成に関する情報を得る意味から、一歳前後が適当であると考え、一応の目安として一歳プラスマイナス六か月（生後六か月から一年六か月まで）としたが、それ以前あるいは以後の子どもも若干含まれている。

対象児の性別は男子六〇名女子七〇名である。

対象児の兄弟順位は、第一子八〇名、第二子四五名、第三子五名である。

母親の職業の有無に関しては、職業無一〇七名、職業有二三名

で、家庭外に仕事をもつている母親の職業は、教師（短大、高校、中学、小学校、保母、看護婦、会社事務員、組合事務員、電話交換手、デパート店員、喫茶店ウェーネス、学生、大学研究生成り、家庭内に家事以外の仕事をもつている母親は、魚屋、菓子製造などの自営業、家庭内の内職などである。

○居住地は東京近郊。

○父親の職業は、ほとんどが俸給生活者で、自営が少數例ある。

○家庭の構成人員は、父親、母親、対象児である場合と、それに兄弟が一人あるいは二人が加わる場合がほとんどであり、いわゆ

る核家族である。その他の人が同居している例は五例あり、同居家族は祖父母、叔父などである。

(II) 手続き

知人の家を訪問したり、団地内にある公園などで子どもを連れ遊びに来ている母親に直接を申し込んだ。また、零歳児保育を行なっている保育園などに行き、夕方子どもをむかえに来た時に母親と面接した。

(四) 質問項目

一、摂食状況について。健康状態、栄養法、授乳のしかた、子どもの飲み方、それに対する母親の対処のしかた、離乳の時期及び状態。

11. object attachment について。object attachment (乳児期の特定の「物」への強い愛着行動) の有無、対象の種類、対象に対する子どもの反応、指しやぶり（広義の object attachment の一つと考えた）の有無。

三、養育行動について。養育者は誰であるか、attachment の形成されている対象は誰であるか（これは養育者と同一人であるか）、一緒に遊ぶ人は誰であるか（これは attachment の形成される対象と同一人であるか）、母親と子どもの遊びの時間量、母親と子どもの遊びの内容、どのような母親と子どもの相互作用が子

どもにより多くの満足を与えるか、子どもが泣いた時の母親の対処のしかた、それに対する子どもの反応。

四、attachment行動の有無とその出現時期、attachment行動パターンはAinsworth(1963)の十一項目に依つて九パターンを作った。

- 視覚的定位
- 差別的に泣く
- 差別的微笑発声
- 見えなくなると泣く
- 追従
- 安全基地からの探索
- 接触
- しがみつき
- あいさむ

結果及び考察

① 母親への attachment 行動について

まず、それぞれのattachmentパターンの形成について見てみよう。九パターンの月齢別出現率をグラフに示したもののが図一である。なお、図一で同一パターンでありながらグラフが上下に変動しているパターンが見うけられる。本研究においては、たとえ、

現在月齢が進んでしまっているためにこの行動型が実際にはない場合でも「～がありましたか？」と質問することによって、以前にあった場合には「出現した」の方に分類している。従つて、月齢が進んでしながら出現率が下降していること自身が矛盾となる。

このような結果がどこから生じたかというと、まず第一に、本研究が横断研究のためであつて、対象児は、それぞれ別々の子どもを月齢の面から分類し、出現率を求めたものである。第二に、子ども間の個人差のためである。発達的要因を超えた大きな個人差があることを示していると解釈できるであろう。第三に、母親との面接において「そのような行動があつたかなかつたか忘れた」と答えた母親が数人いたが、結果の整理上「出現した」には加えていない。そしてこの種の回答は、子どもの月齢が進んでいる母親に多かつたようである。

○視覚的定位 「お子さんは、あなたを見ることができる時は眼を向け続けて眼で追うことがありますか（ありましたか）。」「いふるからですか」

このパターンは、最も早く現われ最も早く出現し終る。早い場合は、生後一ヶ月齢で現われるが多くは三ヶ月齢で現われる。従つて、三ヶ月児すでに九四%の子どもに現われている。そして、それ以後は新たにこのパターンを現わす者は少な

い。すなわち、このパターンは、初めて出現する時期の幅が最も短い間に限られている (S・D・I・六〇)。また、全体で八八・五%の子どもに見られ、九パターン中二番目に高い出現率となつてゐる。それはこのパターンが他の attachment パターンに先立つものであるために、母親にとって新鮮な感覚で抱えることができたためでもあると思われる。しかしながら、このパターンが

早期に出現するためには、このような行動型があつたことは思い出されるが、いつころから現われていたかという点はわからない、と答えられた母親が二〇名にものぼつてゐる。

○差別的に泣く「お子さんは、あなた以外の人に抱かれると泣き出し、あなたが代つて抱くと泣きやむといったような人見知りをしますか（しましましたか）」

このパターンは、いわゆる「人見知り」として一般に知られてゐる現象である。それだけによく気つかれるものであるらしく「あつた」と答えた者のうち、「いつころからかは忘れた」という

母親はわずか一名である。出現時月齢は六ヶ月に明らかなピークを示し、また出現率では六一～九・〇か月齢の間に著しく増加し、九か月齢以後ではあまり増加率は伸びず六〇%前後である。この結果から、このパターンは、一般に人見知りとしてよく知られ、母親も注意を向けている割には、出現し終つたと思われる九

か月齢以後ではさも六〇%の子どもにしか現われておらず、残り四〇%の子どもは、この行動型を現わさないようである、と言えよう。

○差別的微笑発声「お子さんは、あなたと一緒にいる時の方が他の人と一緒に時よりもよく笑つたり声を出したりしますか（しましたか）」

このパターンは、総じてどの月齢段階においても出現が少ない。平均出現率では最も低く四三・八%である。出現時月齢でも著しいピークが見られない。また半面、どの発達段階にも現われており、従つて、発達的要因によって出現を予測することが割合に困難な行動型である。

○接触「お子さんは、あなたのひざによじ登り体にさわつたり、顔や髪や衣服で遊ぶことがありますか（ありましたか）」

「いつころからですか」

このパターンは、最も多くの子どもに見られたパターンである。出現率の平均は九一・三%にのぼり、特に九か月以後では一〇〇%の出現を示している。すなわち、月齢が進むにつれて出現も増加しており、ここに明らかな発達的要因を見ることができる。

『attachment』という語が示すように、attachment 行動は最も簡単な原始的意味では乳児が母親に対してもつて行動である。

その点からすると、このペターンは attachment が最も端的に表われているペターンであるといふことができるのではないだろうか。それゆえ、いろいろな状況や条件を設定することなしにこの行動は起りえて、多くの変化のある attachment 行動の基となる行動なのであるうと思われる。

また、直接的に母親の身体とかかわりをもつものであるから、母親自身がよく記憶することができ、それゆえ高出現率となっているのかもしれない。従って、実は他のペターンとともに同様に子どもは現わしているのだが、母親が気づかずすごしているのかも知れないということをこれは暗示しているのではないだろうか。

。しがみつき「知らない人がいる時やなにかこわい場面では、しつかりとあなたにしがみつくことがありますか（ありましたか）。しがみつきからですか」

このペターンは、出現開始の時期が最も多岐にわたっていて（S・D・三・九七）出現時期のピークがはっきりとしない。従つて、この行動型は出現時月齢にあつとも個人差があるといえる。それは、子どもにしがみつきを起こさせるような体験が多く個人的事情によるものであり、その機会にいつ遭遇したかに大きく左右されていることによると思われる。

それでは、現在「しがみつき」が現われている場合には、どの

ような状況でそれが起るのかを見てみると、月齢の低い場合には単純な物音による驚きや身体的危険のための恐怖など（例、動くおもちゃや、トランクの音、犬のほえる声）が多いのに対し、月齢が進むにしたがつて未知のものや何かを暗示しているようなものなどに対する不安感（例、カーテンが夜ゆれる時）に変わつているようである。また「知らない人がいる時」は、どの月齢においてもしがみつきをひきおこす場合があるようである。

。見えなくなると泣く「あなたが部屋から離れてお子さんから見えなくなってしまうと、泣き叫ぶことがありますか（ありましたか）。いつころからですか」

このペターンも、出現時期が広い範囲にわたつていて個人差が大きい。また、全体で五〇・八%の子どもにしか現われておらず、「差別的微笑発声」に次いで出現率の低いものである。これは、現在の都会の近郊においては住宅事情は非常に困窮しているため、ごく小住宅に住み、母親が子どもの視界からはなれることが少ないことも一因であろうと思われる。なお、後述する母親の職業の有無と attachment 行動についてみた場合には、職業をもつ母親の子どもの方がより多くこのペターンを示している。

。追従「お子さんは、ハイハイ（這い這い）できるようになるとあなたが部屋から離れた時に泣き出すだけではなく、後を追つてく

る」とありますか（ありましたか）。いつからですか」

このペターンは、明らかな発達的变化を示すものの一つである。それは後追いすることが、その前提として運動機能の発達を待たなければならないことに一部よると思われる。従つて、六・

〇か月以前には出現している者はごく少数であるが、次の半年間、すなわち六・一～一二・〇か月に出現率は急上昇を示し、その半年間では最も出現率の増加が著しいペターンである。また、全体の平均出現率も六七・七%で三番目に多く現われている。一二か月齢以後だけをとつてみると、九二・五%の高率を示している。

従つて、「追従」は attachment ペターンとして最も一般的ペターンの一つであるといふことができるであろう。

○安全基地からの探索 「お子さんは、這うようになつて他の人や物に興味を持ちはじめてさわりに行つたりする時に、なにか危険なことがあつたり驚いたりした場合にはすぐになんかの所へ逃げこむように戻つてくることがありますか（ありましたか）。いつからですか」

このペターンは、最も著しい発達的変化をとげているペターンである。それは「追従」と同様に、運動機能の発達を待たねばならない行動型のためである。また、九ペターン中、最も後から形成され、最も後まで出現率が増加を続けている。それはこのべ

ターンそれ自身が attachment 行動の中でも後から発達するものであるばかりでなく、このペターンは出現の早期には母親によつてはつきりと認知されることが困難であり、何度もたび重なつてから気づかれるためであろう。

このペターンに関しては、他のペターンとは多少 attachment の内容に異なる特色があることに気づく。それは、母親を探索行動をする時の安全基地として使うということは言うまでもなく、その前提として子どもが探索行動に出かけることがある。この探索行動に出かけるという行動は母親から出てゆく行動である。一方、他の八つのペターンは母親へ向つてゆく行動である。従つて、他の八つのペターンはその行動それ自身が母親への第一次的な attachment 行動であり、母親自身が子どもにとって目標であり目的であるが、一方、この安全基地として母親を使う行動型は、母親を求めるとは同じであるけれどもそれは第二次的に派生した行動であつて、それ以前の段階においてあの場所へ行けば安全であるというように思わせる経験ができ上つていなければならぬ。その、以前の経験というのが第一次的母親への志向であるところの他の八つの attachment 行動に他ならぬのである。

したがつて、第一次的母親への志向行動が充分に安定してはじめて探索行動に出られるのであって、この「安全基地からの探

索」はそれ自身が attachment 行動の一つであると同時に、他の八つの attachment 行動がすでに充分形成されているかどうかのバロメータの役割をも持っていると言えよう。そして、このパターンが一番後から形成され始めて、著しい発達的変化を示し、六・〇か月までには一人も現われていなかつたのが一八・〇か月以後にはすべての子どもに現われているということは、他の attachment 行動の形成のための有効なバロメータとなることを裏づけているものと思われる。

あいさつ「あなたがお子さんの許からしほらへなくなつた後再び戻つてくると、お子さんは抱いてくれといつて、腕をあげてあいさつしたり、明らかな喜びの表情で両手をたたいたりすることがありますか（ありましたか）。」（つづるからですか）

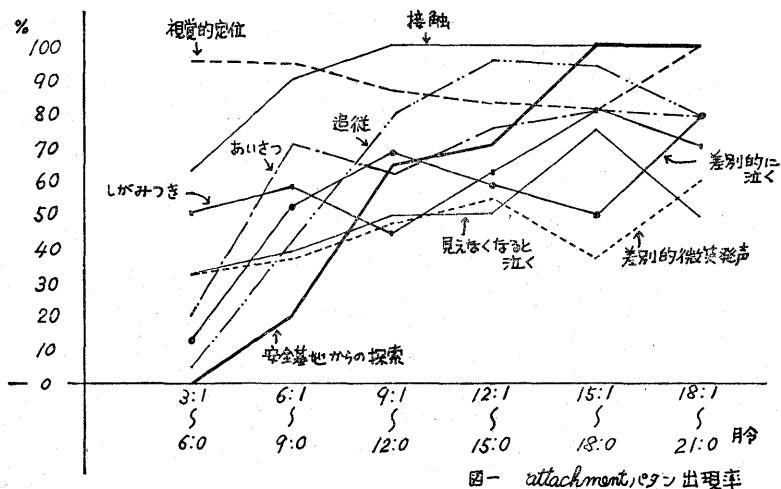
このパターンは、六・一～九・〇か月の三か月間に著しい出現率の増加を示し、その三か月間では最も高い増加率である。また、やや個人的状況の条件によつてひきおこされる行動であるため、出現時期に幅があり個人差が認められる（S・D・III・11・11か月）。また、「見えなくなると泣く」と同様に、職業をもつ母親の子どもの方が多く出現している。

以上の結果をまとめると、図一からも明らかになつた「視

算的定位」が最も早く形成され六・〇か月には形成され終つて、るという例外を除くと、他の多くは六・一か月から一二・〇か月に形成されることがわかる。特に六・一か月から九・〇か月の三か月間は明らかな増加を示している。そして、一二か月以後は本研究の対象児数が少數であるために個人差の方が一般的傾向を凌ぐ結果となつてしまつたが、それでもなお確実に増加を続けているのは「安全基地からの探索」であることがわかる。

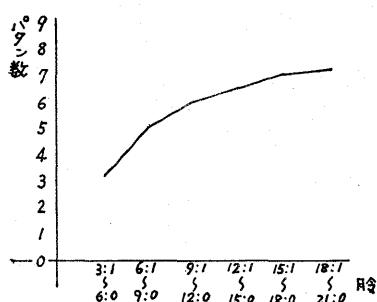
また、九パターンのすべてが必ずしもすべての子どもに現われるわけではないといふことが明らかとなつて、図三を見るところ、attachment が形成され終つた段階において平均で七パターンとなつて、また、一般的傾向としては、attachment パターン数は月齢が進むのに伴つて増加しており、明らかな発達的変化があることが認められる。

次に、attachment パターンの出現時月齢を九パターン全部の延べ人數で表わした図二から、attachment の形成される時期は多くは生後一二か月までであり、それ以後に新たに形成される例はいく少ない。この結果は、Bowlby（一九六九）がattachment の形成時期について指摘したものと一致している。したがつて、attachment 行動とはまさに乳児期の母子関係といふことになるだらう。（つづく）（表と図は49頁）

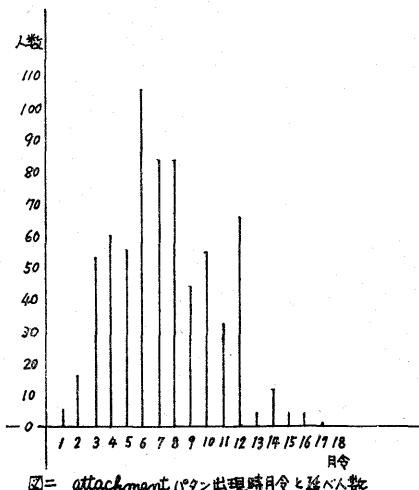


表一. 対象児の月令と人数

月令	人数
0:1 ~ 3:0	0
3:1 ~ 6:0	16
6:1 ~ 9:0	31
9:1 ~ 12:0	31
12:1 ~ 15:0	24
15:1 ~ 18:0	16
18:1 ~ 21:0	10
21:1 ~ 24:0	2
計	130



図三 attachmentパターン平均出現数



図二 attachmentパターン出現時月令と絶対人数

「それぞれの子どもらしさを求めて」より（八）

名古屋市立大高幼稚園



お月さま

◇ ◇ ◇

きょう帰りに、お月見の話をしていたら、

しげひこが、

「うさぎのついたおもちが、ぱらぱらとあ
つてきて、人間は、それを食べるんだよ」

という。するとあや子が、

「ちがうよ。うさぎがおもちをついて、

それをお月さまにあげるのだよ」

と反論した。今度はまた、しげひこが、

「そんなバカなことがあるか。だってう
さぎのついたおもちが、月へあがっていく
はずはない。ロケットに乗らなきや行けな
いんだぞ」

といい返していた。

「でもアポロ十一号が月へ行って見てき

たら、うさぎはいなかつたんだって」

とかよ子がいう。

だんだん生きてきたぞ

だんだん生きてきたぞ

しんいちは作ることが好きで、きょうも、

「作ってみよう」

と雑誌の付録をみながらねずみを作つてい
た。はじめに作ったねずみは、いさおにや
つてしまつた。そしてふたつ目の自分用の
ねずみを作りながら、

「だんだん生きてきたぞ」

とひとりごとをいいながら、いっしょうけ
んめいに作っていた。

ここに、現実と空想が入りまじつて、
る、子どもの世界をみることができる。教
師の心に、いつまでも残るほほえましい、
楽しい会話であつた。この会話に教師のは
いる場はないし、はいる必要もない。

（五歳児 九月一十一日）

◇ ◇ ◇

だんだん出来上がつてきてねずみらしくなつくることを、"生きてきたぞ"といふことばでいい表現しているのだが、おもしろい表現であると思った。このことばにはしんいちが製作に打ちこんでいる心の深さがひめられており、そのねずみが、いま

にもとび出してくるのではないかとさえ教師には思われたのである。

(五歳児 九月三十日)

「しっかりかたづけなさい」とねこがいつているところは、やつぱりかたづけになつたらきちんととかたづけなければならないということが頭ではわかっているのだと思つた。

(五歳児 十月七日)

もうねこちゃん東京へ帰るの

「ねこちゃんが、そういうたの？じや、

最近やえ子はぬいぐるみのねこが大のお気に入りで、登園するとすぐそれをかかえる。きょうも、ねこをかかえて鉄棒や砂場

で遊んでいた。それから保育室へ帰つてしまふとをしていた。かたづけの時そのねこを抱いてやつてきて、

ぼくたち友だち

「ねこちゃんが、しっかりかたづけなきやね」

砂場で、かつみ・みねお・なおと・まわやの四人が遊んでいた。四人で小さな池をいくつもつくり、池と池をパイプでつなぐ

ように、くぶうしているようであつた。水を汲みにいく係や水を流す係、流すところなど、次から次へと話がはずんでいること

「」のねこちゃん今から東京へ帰るんですよ。そしてあなたもしつかりおかたづけをしなさいっていうんですよ」

とおしゃてくれた。かたづけになるともうねこと遊べなくなるというこの気持ちを、ねこを遠くへやることで、自分の気持ちにきりをつけようとしているのではないかと思われる。

「しっかりかたづけなさい」とねこがいつているところは、やつぱりかたづけになつたらきちんととかたづけなければならない」と声援をおこつた。
（五歳児 十月七日）

なものがあるのだと思う。ねこを手ばなしすよ。そしてあなたもしつかりおかたづけをしたということがいえるようと思われる。

やえ子と特に親しかったきみ子・よしみとの関係が動搖していることが原因のようである。"東京へ帰る"ということは自立し

ようと努力している心のあらわれのように思われ、ここにやえ子のしさが感じられて、教師も心の中で、"やえ子、がんばれ"と声援をおこつた。

がわかった。そこへのぼるがロボコン（テ

まりをうろうろしながら

レビのマンガにててくるロボット）の絵を持ってきた。一瞬みんながその方へ集まり、

「いいな、のぼるちゃんがかいたの？」
「自分がかいたの？」

などとうらやましい気持ちと感心したようなど気持ちでしばらくみていたが、

「これは、いさお君にかけてもらったのだよ。ほくかけないもんね」

と素直に自分でないということをいう。
「あいつは、かくのがうまいなあ！」
「ほんとうだな、天才だな」

「大きくなったら漫画かく人になればいいのにな」

「ロボコンの漫画？」

「ばか！ それまでにロボコン最終回になるにきまつとるがね」

「あつそうか！」

と話をしながらまた自分の遊びにもどつていった。ひとり残されたのぼるは、砂場の

「入れて！」

といつて。砂場の子どもたちは、誰も

「いいよ」と返事をしたわけではなかったが、ロボコンのことを話し合ったことでのぼるはすでに仲間として受け入れていると

いうふんい気であった。みねおは、

「ロボコン、ロボコン」

とリズムをとつて、くちずきながら砂を掘り進めているし、他の子どもたちは、ロボコンのことを話題にして水を流したり、運んだりしている。

◇ ◇ ◇

ロボコンのことで同じ気持ちになれるといふことは、『仲間だな』という安心感があるのかなあとも思った。いさおが、そこにいなくとも他人のよさを素直にみとめられることを感じ嬉しく思った。

『入れて』といつて入ったのぼるは、特

に砂遊びをしたいようではなかった。池の

まわりをまわったり浮いている舟にちょっ

とさわったりしているだけである。それをみてまさやが、『のぼるちゃん、あんた入れてといつたけど、ちっとも手が汚れとらんがね』といった。のぼるはそれに対してもうだよ、ほくはただ入りたいだけで、きょうはよこさんのだもの、そつちは汚れてますね』といつて。まさやとしては、いっしょの遊びに入ったのだから、同じように砂をいじり手がよごれていないと遊んでいないと思うのだろう。のぼるとしては遊びをみて入りたくなつたのでなく、自分の持つてきたロボコンにみんなが注目してくれたので、なんとなくいっしょにいたいよう気持になつたのだろうと思つた。ふたりの気持ちはぴつたりしていなかつたが、どこかでつながつていることを感じた。遊びはその後五人のサッカーごっこになつていつた。この頃になると共通の話

題について話し合うことができるようにな
らくる。

(五歳児 十月二十九日)

はじめる。

幼稚園やめるもんなあ

遊戯室で積み木あそびをしていたしげお

は、保育室へきてみると、みんなが新しい

紙ひじょうきを折っていたので、自分もその

紙をもらつて遊戯室へもどつていった。今

度はくにおが、

「しげおくんみたいな紙ちょうだい」

といひにきた。しばらくするとまたくにお

がやつてきて、

「けいすけくんも紙がほしいんだって」

と紙をとりにきた。教師は以前から、くに

おは、しげおや、けいすけのつかいぱしり

のようなことを、よくやらされているとい

うことを感じていたので、

「けいすけくんに、紙がほしかったら自

分でとりにいらつしゃいといつてね」

とくにおに話し紙をわたさなかつた。しば
らくするときいすけがやつてきて、紙が入
れてある箱をのぞいていた。そのときもう
紙は全部なくなつていた。けいすけが紙が
ほしくてとりにきたことがわかつた
ので、

「けいすけくん、何かいいたいことある
でしよう」
と笑いながら声をかけてやつた。その時は
いくぶんけいすけをからかうような気持ち
もあつたし、こういうふうにかかわつてい
つてもけいすけにはじめうぶん通じると思
つたのである。しかし、この教師のことば
かけに對して何も答えず、

「何だあ、紙なんかないがや」

といったような様子をみせてでついてし
まつた。何となく気になつたので、すぐ紙

をもつて遊戯室へつた。けいすけは他の

子どもがひじょうきをとぼして遊んでいるの

をじつとみていた。

「先生、けいすけくんがほしいだらうと

思つたからもつてきたの。紙はこじにおい

ておくわね。ほしくなつたら使つて」

紙がほしかつたのに、先生はくれなかつ
たという気持ちがけいすけの心の中にあり
た。教師が「自分でとりにきて」といったこと
が、こんな結果になつてしまつた。『先生
のばかやろう』とけいすけにいわれた時、
けいすけだつたら通じるだらうと思つた対
し方が、けいすけの気持ちをきずつけてし
まつたことを大いに反省したのである。

紙を受けとつてくれないので、

「先生、けいすけくんがほしいだらうと

思つたからもつてきたの。紙はこじにおい

ておくわね。ほしくなつたら使つて」

「けいすけくん、紙をもつてきただよ」と
いひて泣きだしてしまつた。そして、積
み木の家の中にもぐりこみ

「もう紙なんかいらんわ」とすねていた。

「先生のばかやろう」といつてさしだすと

「けいすけくん、紙をもつてきただよ」と
いひて泣きだしてしまつた。そして、積
み木の家の中にもぐりこみ

「もう紙なんかいらんわ」とすねていた。

といつてそばにおき遊戯室をでた。

◇ ◇ ◇

しばらくしてけいすけが部屋に入ってきた時、教師がもつていてやつた紙で作ったグローブが、手にはめられていたので、

「けいすけくん、こきげん直してくれた？」
と声をかけると半分でれているような笑いをみせ、顔をよこむけて通りすぎていった。そのあとで遊戯室へ行くと野球をして遊んでいたが、教師の姿をみると、

「ぼくたち幼稚園やめるもんなんあ、新しい幼稚園ぼくたち四人で作るもんなん」
とけいすけがいった。
「やつぱりやめた。けいすけはいばるもんな」

「うん、この幼稚園すぐお帰りになるもんな。いっぱい五時ぐらいまで遊べる幼稚園を作るもんな」

た。

そのうちしげおたちは、

「やつぱりやめた。けいすけはいばるもんな」

とすぐ気持ちをひるがえしていたが、けいすけだけはそうではないようであった。そ

のあとけいすけによく話しかけ、どうにかけいすけの気持ちをほぐすことができたようであるが、それにしてもきょうは反省させられた一日であった。

翌日のぶおが、



「あれ、けいすけくん、もう幼稚園やめるといつていたのにきてるよ」と不思議そうな顔でいった。当のけいすけは、いつものメンバーで野球ごっこに夢中で教師はほっとした。

(五歳児 十一月二十一日)

学校訪問旅行記雑感（その一）

村田修子

昨年は私にとって、さまざまなことで記念すべき年でした。

その一つは「文部省教員海外長期派遣」の一員に加えて頂いて、アメリカ、ヨーロッパの教育事情等を三十日間にわたって見て歩くことができたことです。

その視察は一か所に四泊五日ずつとい

割合いでゆったりとした計画なので、いろいろな部面の実際を見せく頂くことができました。また、見るだけではなく、さまざま経験をすることができましたので、もひときわ深いものでした。

感じたまま、それらを述べてみようと思

いますが、こうした長期の旅行では、本文の学校視察以前の段階の部分のすごし方がどうしても大切なことですので、これからどうしても大切なことですので、これから述べてみたいと思います。

述べてみたいと思います。

よその国の子どもたちが、また先生方が

どんなふうにしているのが、ということな

どに関心がないわけではないのです。いつ

く、自然の美しさを満喫できるときに旅行をしたいとつねづね思っていました。けれども仕事の関係上それはできませんので、

自分でもなぜか、と考えてみました。結

局それは、ことばの問題だと思われました。それには理由がありました。

以前、まだ自由に渡航ができなかつたとき、全く何も分からぬのに一人で東南アジアに出かけたことがあるのです。そのとき、飛行機に乗りおくれそうになつたり、原地の個人の家庭で風習が分からぬため、いらぬ氣を使わなければならぬで大変につかれたり、警官に注意されているらしいのに何も分からぬで困つたり、というような経験があるので、ことばが分からぬのでは本当に大切なことは理解できぬし、その他の生活すべてが思うようにゆかないのなら、さまざまな犠牲を払つて出かけるには効果が少ないのでないか、ということがとても気になつたからです。こんな気持ちでぐずぐずしているうちにもどんどん時が過ぎて、出発の日が来てしまいその流れのまま出かけた、という状態でした。

何故このようなことに話がいつてしまつたのかといいますと、そういう気持ちで出

掛けたのに、アメリカで過ごし、ヨーロッパに入り、次第に帰国の道順になりかかつた時、「もうあと〇日になつてしまつた。帰りたくない」といつたり、思つたりする

ように変化してしまつたのです。
それはことばの不自由さとか、余り知らない人たちと一ヶ月も過す気苦労など杞憂であつて、大変有意義に過ごせたからだと思います。

も同じだといふことができると思ひます。

* * *
た時、「もうあと〇日になつてしまつた。

先ず第一の訪問地はアメリカのニューヨーク州のユティカという小じんまりした都市でした。

そこに行く前に羽田から先ずついたサンフランシスコでは、時間調整のためにゆっくり過ごしました。この間に団員の名前と顔が大体分かつて、うちとけた雰囲気になりました。このもつたいないようにも思えたこの時期がそれ以後の学校訪問を、そして毎日の生活をなごやかに過ごすもとを作つてくれたようで矢張り必要であつたことを痛感しました。

またここでは丁度御訪米中の両陛下の本を実際に身をもつて感じたのです。

いうならば、それだけ子どもたちの教育にたずさわっている人たちの心は、どこで

を追い、金門橋でその望みを果し、(この時)のことは帰国後或るグラフを見たとき、両陛下のお車の後方に私共の乗ったバスがとまっているのを見つけて感激を新たにした)再度ご出発なさるときホテルの入口附近でお送りしたことなどは、みんなに「日本」を身近に思い出させて、それを契機として話もはずみ、一層のまとまりができるといったことは非常に幸せなことだったと思ひます。

私たちも子どもとのかかわり合いについて、先ずお互いによく気心を知り合わなければ何の効果もあけることができない、とよくいいます。おとなの場合でも全く同じで、一か月間も寝食を共にしてよい雰囲気で過ごすためには、どうしてもこのまとまりが必要なのです。それ以後は終始、どういうときでもお互いに助け合いながら過ごせたことは、何にも勝る収穫であったと思っています。

さて、ユティカ(UTICA)の話に戻りま
すが、今迄に一度も聞いたことのない町、
余り大した期待もしないで、ただニューヨ
ーク市(マンハッタンのホテルのあったあたり)の灰色によどんだような空氣、常に
気が許せないような緊張感から早く解放されたいという気持ちだけで機上の人とな
り、五十分という短い間に慌しく軽食をとり、それが終るか終らないうちに着陸態勢
に入った感じなので下を見ると、ほかの飛行機も自動車も、機械類などもなにもな
く、ただ一面緑の芝生の中に滑走路が開かれ、飛行場の周囲の立木は見事に紅葉し、
れば何の効果もあけることができない、と
その美しさに「きれい」と言つたあとしば
らくはことばも出ず、ただ周囲を見回して
いるうちに空港につきました。

その空港におり立つと、のんびりとした
様子を裏付けるように、迎えのバスは来て
いませんでした。

バスをおおりるやいなや、にぎにぎしい英語の挨拶に迎えられました。

それは私たちのつかれをねぎらうために費用を出し合つて開いてくれた晚さんバー
ティに集まつた、ユティカの教育関係の方たちでした。

固苦しい挨拶も余りなく、ただ私たちの心をやわらげようと、マン・ツー・マンで飲

UTICA CITY SCHOOL DISTRICT

Japanese Education Study Group
Schedule of Activities

<u>DATE</u>	<u>DAY</u>	<u>ARRIVAL</u>	<u>PROGRAM</u>	<u>LOCATION</u>	<u>DEPART</u>
Oct.15	Weds.	8:45 AM	Heart Disease Prevention	Columbus School	9:30 AM
		9:45 AM	Kindergarten	Hughes	
			LUNCH	Hughes	
			Multi-Age Grouping	Hughes	3:15 PM
		3:30 PM	Holiday Inn		4:45 PM
		5:00 PM	*DINNER	Grimaldi's	7:10 PM
		7:30 PM	Dance Workshop	Jefferson School	9:00 PM

物から食事の総てをこまごまと世話をしてくれました。

公の場で始めてアメリカ人に接すること
で固くなっていた私共も、その暖かい心づ

かいに、思ったよりずっと早くなじむこと
ができる、片言英語で話し、足りないところは手振り身振りで補いながら、二時間程

を楽しく過ごすことができました。外交辞令にしても、「自分たちが日本語を少しも

できないことを悲しく思う」といつてくれたことばに、「私たちはあの人たちよりは、ほかの国のことばも少しほは分かるのだった」と思い直すことができました。

まるで昔の知己が戻ってきたように心から歓迎してくれることに戸惑いを感じ、自分たちが逆の立場だつたらこのようにできただろうか、と反省しながら、心易くなつた方々と共に明日から始まる学校参観に意欲をもやしました。

びとした自然の美しさ、それにも増して暖かい人と人とのふれ合いに、日本を遠く離れている心細さを忘れてしまったひとときでした。

その後、旅行中みんなの会話の中に、「もう一度アメリカにいくことがあったらユティカに行く」「どこかに移り住むならユティカがいい」ということがよく聞かれました。

上にせたプログラムでも分かるように、朝早くから夜おそくまで、献身的に尽してくださいたその暖かい心のふれ合いがあつたからこそ、だと思います。

ユティカでの学校訪問

全員で二十九名でしたが、多人数の参観を好まないらしく、三班に分けられ、それぞれのスケジュールが組まれていました。

本当に全員が思つてもいなかつたのびの

それぞれの班の当日の計画について、毎朝八時から係のミセス・フリードが親切に説明をしてくれました。

私の属していた二班の例をあげてみますと、表にあるように、いろいろなシステムによるクラスを見ることができました。

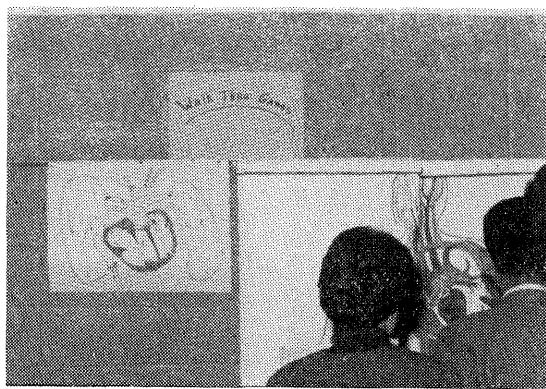
○第一日目の最初のハート・ディズイズ・プレベンションについては前もって字引によつて「心臓病の予防」と附記しておきましたが、それが学校でどのように展開されるのが、全然見当つかないことでした。

コロンブス・スクールの体育館に、人体図に、心臓から出る血管（動脈・静脈）がよく分るよう書いてあるのがはつてあり、心臓に関する本が並べられていました。そこへ五～八歳の十八人位の子どもたちが並んで入ってきて次のようなことを行ないました。

▲毎朝の説明会



- 握りこぶしを作つて胸に当て心臓の大きさや、位置を意識する。自分の手首を握り脈を見る。
- 両脚を開き両手を横にあげ、片手を反対の足先につけて体を捻転する。
- 両脚をかいて二人向き合つて座り、ボールをころがし、つかまえる。
- 片足跳をする。
- 両脚跳をする。
- 十人位で円を作り、手をつなぎ左の方や右の方に走つて回る。
- 三組に分れて折り返しのリレーをする。
- 前と同じように握りこぶしを作り、胸に当てる。
- 心臓からの血管の書いてある図の上を、実際につたつて歩く。
- 心臓からの血管の書いてある図の上を、これ等を見ただけでは普通の体育の時間に活動をしているのと同じで、特別のこと



◆コロンブス・スクールの ハート・ディズイズ・プレベンション

をしているように見えなかつたのです
が、説明を聞いてそのねらつていることが
やつと分かりました。

概要是、アメリカは、栄養摂取の関係や
運動不足等が原因で、大変に心臓病の人
多く、それで早く死ぬ人も多い。そこで予
防策として食生活の反省や、生活習慣の改
善などの根本的な対策がとり上げられてい
ます。こうした社会的な問題が即学校教育
の中にとり上げられているということに、

アメリカの積極的な姿勢というものがよく
うかがえました。
• 全生涯を通じて体をきたえる習慣をつけ
る。
• 自分の健康を保つためのことを身につけ
る。
こういうねらいをもつて一九七四年か
ら、正規の授業に加えて特別なプログラム
として毎日十分位ずつ幼児を対象にやつて
いるけれども、今後はハイスクール迄実施

して、二十年、三十年と続けて、この運動
が家庭の中に自然に普及するようになる、
ということでした。

日本でも次第に心臓病が多くなつてきて
いると聞きますけれども、まだとてもここ
までの見通しはありません。

生活様式、国情、物の考え方の違い、と
いうものをしみじみと感じました。

○キンダー・ガーテン

二班の十一名が更に二つに分かれて参觀
しました。

A組・保育的活動——一週間に一度体育專

科教師がきて指導に当る。

- 絵を見て言葉や文章を正しい発音で
- 音楽の中に物語を吹込み、静かに聞
く。
- 手洗い、うがい、おやつ。
- 語尾まで練習する。また同時に絵の



▲キンダー・ガーテン

内容について興味を持たせるようにする。

- 自分たちで作った家に関係あるものを週刊誌などから切りぬいて、その家の中に入れていく絵画製作の活動。

B組

- 一から五までの数を順序数、逆数で言わせる。

- 八文字までの言語の記憶。

- 交通信号などを使って色を言わせること。

- 蜂になつて遊びながら、数やことばの訓練をする。

- 消防夫になつて遊ぶ。

- 音楽専科教師の指導によつて、レコードに合わせて体操をする。

以上のような実際を見せて頂きましたが、プログラムにあるように、子どもたちは先生を中心に大変静粛に、課題に取り組

んでいました。一日のうちのほんの一部分だけですから何とも言えませんが、教師の

働きかけに対する反応が落ち着いた雰囲気で、小さい子どもながら場をわきまえて行

動している、ということがとても印象的でしたし、子どもをしっかりと握って自信を持

つて、或る種の威厳をさえ感じさせるような態度で接し、しかもやさしく美しく、その上熱意にあふれている先生方に敬服し、大いに反省させられました。

大変活発で自発性に富んでいる、といえぱよきこえますが、おとながひとこと言えば三ことも四ことも先を争つて大声を張り上げる現在の日本の子ども。今の子どもは分からないと自信なげに手を引込んでしまう親、教師。私は「これは大変なことだ」と思いました。終戦直後、これと同じような気持ちになつたことがあります。それは社会のルールも、道徳的な判断も何もなく、全く思つたまま行動して恥かしいこと

を知らずに巷をうろうろして育つていた多くの子どもたちを見たとき、「一体、この子どもたちが大きくなつたときの世の中は、どんなになるのだろう」と気になりました。

しかもその期間というものは、その世代の者が生きている間続くことを考えると大変不安でした。さまざま不安な事件を聞きますと、あのときの心配がやはり本当だった、と思わないではいられないのです。

丁度それと同じような気持ちなのです。何年かたったとき、あの子どもたちと、日本

の子どもたちの間には取りかえしのつかない差ができるような気がするのです。

報告書の団員の感想に、その美しい先生

方が、ひとりひとりの子どもを大切に、その能力に応じ、個性を尊重した指導をしていました。

いるところに大変得るところがあつた、と書かれた方が多かつたのですが、それらの大切さに加えて、子どもたちに信頼され

る雰囲気をもつた教師にならなければ、と思うのです。

けれども日本にばかり問題があるわけではなくて、アメリカにはまたアメリカのなやみがあるようです。（この点については、

ヘッド・スタート、という制度で述べることにします）。

一組の人数が二十四名位で、教師一人に補助員が一名いることなど、国情の相異を

さまざまと感じました。

入園するに当つて入れない子どもはないらしく、従つて競争になることもないことに

なども全然情況がちがうのです。

九月に入園する子どもに対しては、

1 ユティカとしての共通のガイドブックを

父母に配布して幼稚園についての理解を

してもらつ。

これ等はすべて、個々を大切に指導している扱いであることがよく分かります。

面白いと思ったのは、クラスメイトの父の職業を理解してもらうために、それぞれの子どもの父親に仕事着を着て園に来ても

らい、紹介し親しませている、など、家庭とのつながりをも大事にしていることがよく分かりました。

内容としては、幼児のことば、感覺、家

族の状況、親の協力できる度合、運動能

力（歩く、スキップ、ジャンプ等）視力、聴力、心理テスト、ことば等、それぞれの立場から観察して個人のカルテを作成する。

3 それぞれのカルテが集計されると全職員が集まつて、すぐれている点、不足している点、補うべき点、父母、教師は何をすべきか、などを検討して決定する。

4 1か月に一度、校長を中心にミーティン

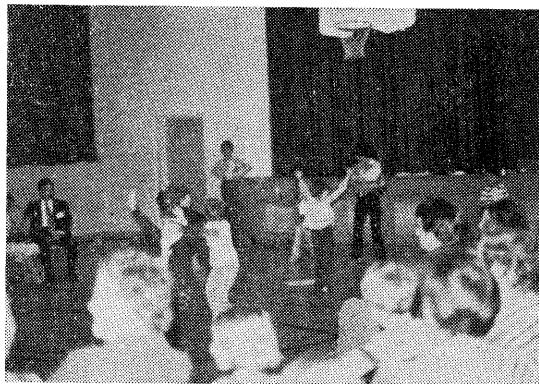
グをし、ひとりひとりの子どもに対しても計画を話し合う。

これらの等はすべて、個々を大切に指導して

いる扱いであることがよく分かります。

面白いと思ったのは、クラスメイトの父の職業を理解してもらうために、それぞれの子どもの父親に仕事着を着て園に来ても

らい、紹介し親しませている、など、家庭とのつながりをも大事にしていることがよ



▲ダンス・ワークショップ

意外であったことは、うらやましいくらい広々とした芝生の庭を持つこと。が殆どでしたが、そこで小犬のように走り回り、ころげ回っている活動的な姿は余り見られなかつたことと、子どもたちが大好きなんらんことなどの設備も貧弱で、全然見当らない園もあつたことです。

- 子どもたちが自らを律していく力や、社会性、親切心を培うのに、年齢のちがうがどうしていい。共同体の中の方が多い。
- という考え方にもとづいて試みられているようです。

○マルティ・エイジ・グルーピング
幼稚園から八学年まであるヒュース学校やその他二、三の学校の中で行なわれている試みのようです。学年のわくをはずし、たて割りの編成で、午前中は Language,

Reading, Writing を中心をおき、午後は数学が行なわれます。そののちにホームルームに帰つて社会や科学、音楽などの学習をします。
このでも子どもの進度に応じて与えるテキストや教材、教具が、その段階に応じて多様に豊富に用意されていて、きめのこまかい配慮がうかがわれました。

- これのねらいは、個々の生徒の進度に合つた指導ができる
- は、十までの数が理解できない子どもがかかる。

なりあって、その表情も楽しそうには見えず意欲的とは思われませんでした。

す。

最後に、父兄の希望者をも参加させて、自分の子どもと共に体を動かし創作的表現

をするまで発展させます。

○ダンス・ワーキングアップ
これは私たちのために開かれたものではなく、普段子どもたちの様子を見られない仕事を持っている親たちに見てもらうための催しに出席したのです。

ダンスを専門に指導している教師（何校かを受持っている）の合図で、スキップやその他の歩法などについて年齢のまざつた三十名位の子どもたちが順々に動作し、年齢の大きい子どもたちは、レコードと、教師の打つタンバリンのリズムによって、基本的な動きや、与えられたテーマを自由に表現するのです。

その自由な表現の前に、親に対して、これからすることとか、子どものリズム感などをについて教師が解説をして理解させま

幼児の教育 第七十五卷第五号

五月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十一年四月二十五日印刷
昭和五十一年五月一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーべル館
振替口座東京一九六四〇番

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

*万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

〈日本幼稚園協会、みどり会からのおしらせ〉

第 3 回 幼児教育カナダ・アメリカ視察旅行

CANADA & AMERICA DPE-SCHOOL EDUCATION TOUR
SANFRANCISCO · LOSANGELES · VANCOUVER

*昨年夏のアメリカ西海岸の視察旅行は、大変好評でしたので、今年はカナディアンロッキーの視察も加えた、幅広いコースを企画いたしました。視察の考え方としては、現職の先生、学生等幼児教育に興味をお持ちの方でしたらどなたでも参加できるように、特にテーマは決めず視察先幼稚園、研究所、の授業参観（サマースクール）、施設視察、ディスカッション等にそれぞれの立場から参加していただきます。

尚視察にあたっては事前オリエーテーションを行い、5～10人に1人の割合で通訳を準備しますので、内容のある視察ができます。

又、アメリカは今年、建国200周年に当り、併せての視察が可能です。雄大なカナディアンロッキーと建国200周年にわくアメリカ西海岸での有意義な視察のひとときに参加をお待ちしております。

*企画概案（詳細は来月号をご覧になるか、パンフレットをご請求下さい）

企 画：お茶の水大学附属幼稚園園長 勝部真長、みどり会会長 山村きよ
コーディネーター

コ ー ス：東京→サンフランシスコ→ロスアンゼルス→カルガリー（カナ
ディアンロッキー）→バンクーバー→東京

期 間：昭和51年7月31日～8月8日（9日間）

視察予定先：スタンフォード大学ビングナースリースクール
カリフォルニア大学ロスアンゼルス幼児教育研究所
ブリティンコロンビア大学幼児教育研究所

費用概算：¥400,000.-（航空機、視察諸費、一流ホテル、観光諸費、食事会の概算）

主 催・日本幼稚園協会・みどり会

〒112 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水大学附属幼稚園内

取扱旅行代理店。 日本交通公社海外旅行新宿支店 担当 久保、富田
〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 (スカイビル内) TEL 346-0170(代)

協 力・フレーベル館

1~3歳児のための特製えほん!

保育室や園文庫に、ぜひお備えください。

ー小型本ー

ひよひよえほん

全8冊1セット

700円
(美麗ケース入り)



ー中型本ー

ころころえほん

全8冊1セット

1,100円
(美丽ケース入り)



☆くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館